

中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(26)

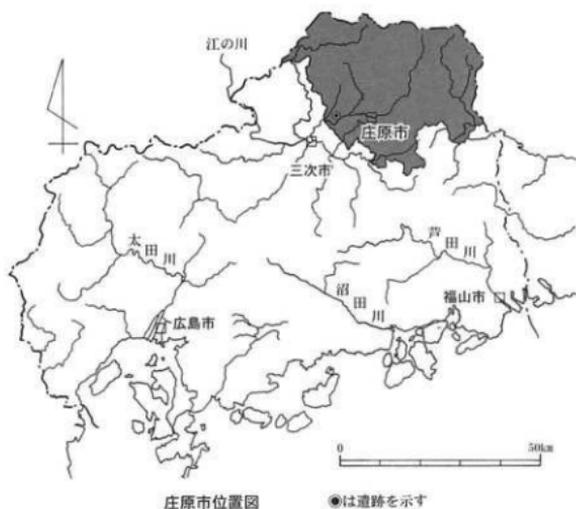
石谷2号遺跡
石谷3号遺跡

2013

財団法人 広島県教育事業団

中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(26)

石谷 2 号 遺跡 石谷 3 号 遺跡



2013

財団法人 広島県教育事業団

例 言

- 1 本書は、中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴い、平成21（2009）年度及び平成22年度に発掘調査を実施した石谷2号遺跡（庄原市口和町金田字塩谷所在）及び平成21年度に発掘調査を実施した石谷3号遺跡（同）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所との委託契約により、財団法人広島県教育事業団が実施した。
- 3 発掘作業及び出土資料等整理作業は、財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室の職員があたり、担当者は次のとおりである。
発掘調査（平成21年度）調査研究員 新井真吾（現北広島町立豊平南小学校）・辻 満久
発掘調査（平成22年度）調査研究員 新井真吾・岩本芳幸（現広島県立海田高等学校定時制）
整理作業（平成23年度）調査研究員 曾根 猛、賃金職員 下戸成菜子
- 4 本書の執筆・編集は、曾根が担当した。
- 5 本書では、石谷2号遺跡・第1次調査区をA地点、同・第2次調査区をB地点と表記する。
- 6 本書に使用した遺構の略号は、次のとおりである。
SB：竪穴住居跡・掘立柱建物跡 SK：土坑 SX：その他の遺構
- 7 土器の断面については、須恵器は黒塗り、その他は白抜きである。
- 8 挿図の遺物番号と図版の遺物番号は、同一である。
- 9 本書に使用した北方位は、旧日本測地系平面直角座標系第Ⅲ座標系北である。
- 10 第2図は、国土交通省国土地理院発行の1：50,000地形図（上布野）を使用した。
- 11 本書に掲載した空中写真は、株式会社イビソクの撮影による。
- 12 記録類及び出土品については、広島県立埋蔵文化財センター（広島市西区観音新町四丁目8-49）において保管している。

目次

I	はじめに	(1)
II	位置と環境	(6)
III	石谷2号遺跡	
1	調査の概要	
(1)	立地と調査前の状況	(12)
(2)	調査の概要	(12)
2	遺構	
(1)	A地点	(13)
(2)	B地点	(15)
3	まとめ	(44)
IV	石谷3号遺跡	
1	調査の概要	
(1)	立地と調査前の状況	(50)
(2)	調査の概要	(50)
2	遺構と遺物	
(1)	竪穴住居跡	(50)
(2)	土坑	(56)
(3)	その他の遺構	(57)
3	まとめ	(59)

挿図目次

第1図	中国横断自動車道尾道松江線路線図	(5)
第2図	周辺主要遺跡分布図(1:50,000)	(7)
第3図	周辺地形図(1:2,500)	(11)
石谷2号遺跡(A地点)		
第4図	A地点遺構配置図(1:300)	(12)
第5図	SK1・SK2実測図(1:40)	(14)
第6図	SK3・SK4実測図(1:40)	(15)
石谷2号遺跡(B地点)		
第7図	B地点遺構配置図(1:300)	折込

第8図	SK5・SK6実測図(1:40)	(17)
第9図	SK7実測図(1:40)	(18)
第10図	SK8実測図(1:40)	(19)
第11図	SK9実測図(1:40)	(20)
第12図	SK10実測図(1:40)	(21)
第13図	SK11・SK12実測図(1:40)	(22)
第14図	SK13・SK14実測図(1:40)	(23)
第15図	SK15・SK16実測図(1:40)	(24)
第16図	SK17・SK18実測図(1:40)	(25)
第17図	SK19・SK20実測図(1:40)	(26)
第18図	SK21・SK22実測図(1:40)	(29)
第19図	SK23・SK24実測図(1:40)	(30)
第20図	SK25・SK26実測図(1:40)	(31)
第21図	SK27・SK28実測図(1:40)	(32)
第22図	SK29・SK30・SK31・SK32実測図(1:40)	(33)
第23図	SK33・SK34・SK35・SK36実測図(1:40)	(35)
第24図	SK37・SK38・SK39実測図(1:40)	(37)
第25図	SK40・SK41実測図(1:40)	(38)
第26図	SK42・SK43実測図(1:40)	(39)
第27図	SK44・SK45実測図(1:40)	(41)
第28図	SX1実測図(1:40)	(42)
第29図	SX2・SX3実測図(1:40)	(43)
第30図	A地点陥穴配列図(1:400)	(45)
第31図	B地点陥穴配列図(1:600)	(46)

石谷3号遺跡

第32図	遺構配置図(1:200)	(51)
第33図	SB1実測図(1:60)	(52)
第34図	SB1カマド跡実測図(1:30)	(53)
第35図	SB1出土遺物実測図(1:3, 1:6)	(54)
第36図	SB2実測図(1:60)	(55)
第37図	SK1実測図(1:20)	(56)
第38図	SK2実測図(1:20)	(57)
第39図	SX1・SX2実測図(1:20)	(58)
第40図	調査区外出土遺物実測図(2:3)	(58)

表 目 次

第1表	中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧	(2)
第2表	石谷2号遺跡土坑計測表	(49)
第3表	石谷3号遺跡出土遺物観察表	(80)

図 版 目 次

図版扉 空中写真(南東から)

図版1 a 空中写真(北西から)

b 空中写真(北西から)

石谷2号遺跡(A地点)

図版2 a 空中写真(北から)

図版6 a SK9完掘(南から)

b 同左(南西から)

b SK9土層断面(南から)

c 調査前全景(南東から)

c SK10完掘(南から)

d 調査後全景(北西から)

d SK10土層断面(南から)

図版3 a SK1完掘(北西から)

e SK11完掘(南から)

b SK1土層断面(南西から)

f SK11土層断面(南東から)

c SK2完掘(西から)

g SK12完掘(南から)

d SK2土層断面(西から)

h SK12土層断面(南から)

e SK3完掘(北西から)

図版7 a SK13完掘(北東から)

f SK3土層断面(西から)

b SK13土層断面(北から)

g SK4完掘(北西から)

c SK14完掘(北西から)

h SK4土層断面(北西から)

d SK14土層断面(北西から)

石谷2号遺跡(B地点)

図版4 a 空中写真(西から)

e SK15完掘(南東から)

b 調査後全景(北西から)

f SK15土層断面(南東から)

図版5 a SK5完掘(北西から)

g SK16完掘(南から)

b SK5土層断面(南から)

h SK16土層断面(南から)

c SK6完掘(南西から)

図版8 a SK17完掘(西から)

d SK6土層断面(北西から)

b SK17土層断面(南から)

e SK7完掘(南西から)

c SK18完掘(東から)

f SK7土層断面(南から)

d SK18土層断面(北から)

g SK8完掘(南から)

e SK19完掘(南から)

h SK8完掘(南西から)

f SK19土層断面(南から)

g SK20完掘(西から)

h SK20土層断面(南から)

- 図版 9 a SK 21 完掘 (北から)
b SK 21 土層断面 (北から)
c SK 22 完掘 (北から)
d SK 22 土層断面 (北から)
e SK 23 完掘 (北から)
f SK 23 土層断面 (北から)
g SK 24 完掘 (東から)
h SK 24 土層断面 (南西から)

- 図版 10 a SK 25 完掘 (西から)
b SK 25 土層断面 (南から)
c SK 26 完掘 (南から)
d SK 26 土層断面 (南から)
e SK 27 完掘 (南から)
f SK 27 土層断面 (南から)
g SK 28 完掘 (南から)
h SK 28 土層断面 (西から)

- 図版 11 a SK 29 完掘 (南から)
b SK 29 土層断面 (西から)
c SK 30 完掘 (南から)
d SK 30 土層断面 (南から)
e SK 31 完掘 (南から)
f SK 31 土層断面 (南から)
g SK 32 完掘 (南から)
h SK 32 土層断面 (南から)

- 図版 12 a SK 33 完掘 (南から)
b SK 33 土層断面 (南から)
c SK 34 完掘 (南から)
d SK 34 土層断面 (南から)
e SK 35 完掘 (南西から)
f SK 35 完掘 (西から)
g SK 36 完掘 (南から)
h SK 36 土層断面 (南から)

- 図版 13 a SK 37 完掘 (南から)
b SK 37 土層断面 (南から)
c SK 38 完掘 (南から)
d SK 38 土層断面 (南から)
e SK 39 完掘 (南西から)
f SK 39 土層断面 (南東から)
g SK 40 完掘 (南西から)
h SK 40 土層断面 (南から)

- 図版 14 a SK 41 完掘 (南西から)
b SK 41 土層断面 (南西から)
c SK 43 完掘 (南西から)
d SK 43 土層断面 (南から)
e SK 44 完掘 (南西から)
f SK 44 土層断面 (南から)
g SK 42 完掘 (南西から)
h SK 45 完掘 (南東から)

- 図版 15 a SX 1 完掘 (南東から)
b SX 2 完掘 (南東から)
c SX 3 完掘 (南西から)

石谷3号遺跡

- 図版 16 a 空中写真 (東から)
b 同左 (南西から)
c 調査前全景 (南東から)
d 調査後全景 (南から)

- 図版 17 a SB 1 完掘 (南から)
b SB 1 遺物出土状況 (南から)
c SB 1 土層断面 (南から)
- 図版 18 a SB 1 土層断面 (東から)
b SB 1 カマド検出状況
(西から)
c SB 1 カマド土層断面
(南西から)

- 図版 19 a SB 2 完掘 (南から)
b SB 2 土層断面 (東から)
c SK 1 完掘 (南から)

図版 20 a SK 1 土層断面 (東から)

b SK 2 完掘 (南東から)

c SK 2 土層断面 (東から)

図版 21 a SX 1 完掘 (南から)

b SX 1 土層断面 (南から)

c SX 2 完掘 (南から)

図版 22 石谷 3 号遺跡出土遺物



石谷 2 号遺跡 B 地点作業風景 (北から)

1 はじめに

石谷2号遺跡・石谷3号遺跡の発掘調査は中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係るものである。本建設事業は、山陽自動車道・中国自動車道・山陰自動車道及び西瀬戸自動車道との接続により中国・四国地方の広域的な交通ネットワークを形成し、瀬戸内海側地域と日本海側地域を結ぶ幹線道路として、輸送時間の短縮、一般道路の交通混雑の緩和を図り、この圏域の産業・経済・文化の飛躍的発展と沿線地域の生活の向上に大きく寄与しようとするものである。

平成13(2001)7月から日本道路公団中国支社広島工事事務所(以下「道路公団」という。)は、広島県教育委員会(以下「県教委」という。)と三次JCT~口和IC間の文化財等の有無及び取り扱いについて協議を開始した。県教委はこれを受けて現地踏査を行い、平成16年8月23日に、事業地内に試掘調査が必要な箇所が存在する旨を道路公団に回答した。

平成17年10月から、中国横断自動車道尾道松江線建設事業は西日本高速道路株式会社(以下「西日本高速」という。)に引き継がれ、さらに、平成18年度から国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所(以下「国土交通省」という。)が事業者となった。県教委は、その後も当該事業地内の試掘調査を実施し、平成20年12月15日に、国土交通省に対して、事業地内で石谷2号遺跡(A地点及びB地点)ならびに石谷3号遺跡を確認した旨を回答した。この遺跡の取り扱いについて県教委と国土交通省は協議を行い、設計変更による現状保存は困難であるため、記録保存の発掘調査を行う方向で調整することとした。

石谷2号遺跡A地点及び石谷3号遺跡については、国土交通省は、平成21年2月13日付けで県教委宛てに文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知(以下土木工事の通知という。)を提出し、県教委は同年2月24日付けで国土交通省宛てに工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。これを受けて、国土交通省は、同年2月26日に財団法人広島県教育事業団(以下「教育事業団」という。)に調査依頼を行った。教育事業団は、同年3月13日付けで県教委宛てに文化財保護法第92条第1項に基づく埋蔵文化財の発掘調査届を提出し、同年3月31日付けで県教委から慎重に発掘調査を実施するよう指示を受けた。教育事業団は、国土交通省と平成21年4月1日付けで委託契約を結び、同年4月13日から6月12日まで発掘調査を行った。石谷2号遺跡B地点については、国土交通省は、平成22年2月16日付けで県教委宛てに土木工事の通知を提出し、県教委は平成22年2月25日付けで国土交通省宛てに工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。これを受けて、国土交通省は、平成22年2月26日に教育事業団に調査依頼を行い、教育事業団は同年3月10日付けで県教委宛てに埋蔵文化財の発掘調査届を提出し、同年3月25日に県教委から慎重に発掘調査を実施するよう指示を受けた。教育事業団は、国土交通省と平成22年4月1日付けで委託契約を結び、同年4月12日から6月18日まで発掘調査を行った。

本報告書は、以上のような経緯のもとで行った発掘調査の成果のまとめであり、埋蔵文化財の資料として当地域の歴史を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

発掘調査にあたっては、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所、西日本高速道路株式会社中国支社三次工事事務所、庄原市教育委員会、庄原市役所口和支所、及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧

報告書	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(1)	牛の皮城跡 (北郭群)	第1次	畝状整堀群 平成15年1月20日～ 3月14日	尾道市御調町大町字 二の丸	中世	城跡
		第2次	1～4郭 平成15年7月7日～ 10月31日			
第3次		西整堀 平成15年11月10日～ 11月28日				
	曾川2号遺跡		平成15年1月20日～ 3月7日	尾道市御調町大町字 西川	古代末～中世	集落跡
(2)	曾川1号遺跡	A地区	旧・平成14 年度調査区 平成14年10月21日～ 平成15年1月17日	尾道市御調町大町字 曾川	弥生時代 ～中世	集落跡
		B地区	旧・P2第一 調査区 平成15年4月7日～ 5月23日			
		C地区	旧・P2第二 調査区 平成16年1月6日～ 2月5日			
		D地区	旧・P1			
(3)	池ノ奥古墳		平成16年8月23日～ 10月28日	世羅郡世羅町宇津戸 字天神	古墳時代後期	古墳
(4)	城根遺跡		平成15年1月27日～ 3月7日	尾道市御調町大町字 城根	古墳時代か	箱式石棺
	牛の皮城跡 (北郭群)	第4次	5郭 平成18年1月30日～ 2月24日	尾道市御調町大町字 二の丸	中世	城跡
	曾川1号遺跡	E地区	旧・P4 平成15年12月1日～ 12月19日	尾道市御調町大町字 米田	縄文時代後期 ～中世	遺物包含 層
(5)	曾川1号遺跡	G地区	旧・P3 平成16年6月7日～ 8月6日	尾道市御調町大町字 曾川・米田	弥生時代 ～中世	集落跡
		H地区	旧・P3側道			
		I地区	旧・P4側道			
		J地区	旧・P2 平成17年1月11日～ 3月4日			
(6)	曾川1号遺跡	K地区	平成17年4月11日～ 7月1日	尾道市御調町大町字 曾川・米田	弥生時代 ～中世	集落跡
(7)	札幌古墳		平成17年11月21日～ 平成18年1月27日	三次市後山町字札幌	古墳時代後期	古墳
	大平遺跡		平成19年6月21日～ 10月5日	三次市後山町字大平	弥生時代後期 ～古代	集落跡
	後山大平古墳		平成19年6月21日～ 10月5日	三次市後山町字大平	古墳時代後期	古墳
(8)	北野山遺跡		平成18年7月3日～ 8月4日	三次市吉舎町字敷地	平安時代	仏教関連 の施設跡
(9)	向江田中山遺跡		平成18年4月17日～ 6月23日	三次市向江田町字中 山	古墳時代末 ～古代	集落跡
(10)	権現第1～3号古墳		平成17年7月11日～ 11月11日	三次市向江田町字権 現	古墳時代中期	古墳
(11)	大番奥池第1～3・7号古墳		平成18年4月17日～ 8月4日	三次市吉舎町字敷地	古墳時代後期	古墳
(12)	茶臼古墳		平成20年7月7日～ 9月5日	三次市甲奴町字賀字 茶臼	古墳時代中期 ～古代	古墳
(13)	瀬戸越南古墳		平成19年6月25日～ 8月10日	三次市向江田町字瀬 戸越	古墳時代中期	古墳
(14)	上陣遺跡		平成19年7月9日～ 8月31日	三次市向江田町字上 陣	古墳時代後期	集落跡
(15)	和知白鳥遺跡(第2次)		平成19年9月25日～ 12月21日	三次市和知町字白鳥	後期旧石器時代	集落跡
(16)	曲第2～5号古墳		平成19年7月2日～ 9月21日	庄原市口和金田字 本谷	古墳時代中期	古墳

報告番	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容	
(17)	家ノ城跡	第1次	南東郭群	平成15年9月16日～ 10月31日	尾道市木ノ庄町木梨 字家城東平	中世	城跡
		第2次	南東郭群	平成16年5月17日～ 6月11日			
		第3次	1郭周辺	平成17年10月17日～ 11月11日			
		第4次	1郭・北尾根	平成18年4月17日～ 7月21日			
		第5次	1郭・北西尾 根	平成19年4月16日～ 6月15日			
(18)	片野中山第9～12号古墳		平成19年4月25日～ 8月10日	三次市吉倉町字敷地	古墳時代中期	古墳	
	右谷遺跡		平成19年4月25日～ 8月10日	三次市吉倉町字敷地	古墳時代後期 ～古代	集落跡	
(19)	和知白鳥遺跡(第1次)		平成18年4月17日～ 12月22日	三次市和知町字白鳥・ 四拾貫町字三重	古墳時代中期 ～古代	集落跡・ 古墳	
(20)	段遺跡	第1次	平成18年9月19日～ 12月15日	三次市四拾貫町字段	古墳時代中期 ～後期	集落跡	
		第2次	平成19年9月25日～ 12月21日				後期旧石器時代
(21)	川平第1号古墳		平成20年4月21日～ 6月20日	庄原市口和町常定字 川平	古墳時代後期	古墳	
	常定川平1号遺跡				古墳時代中期	集落跡	
	常定川平2号遺跡				縄文時代	陥穴	
(22)	稲干場第2～4・9号古墳		平成19年10月9日～ 12月23日	庄原市口和町大月字 稲干場	古墳時代後期	古墳	
(23)	只野原1号遺跡		平成20年9月8日～ 9月26日	庄原市高野町下門田 字只野原	古墳時代	箱式石棺	
	只野原2号遺跡		平成22年4月19日～ 11月19日	庄原市高野町下門田 字只野原	—	自然流路	
	只野原3号遺跡	第1次	平成21年5月18日～ 8月28日	庄原市高野町下門田 字只野原	旧石器時代 ～古墳時代	遺物包 含地 集落跡	
		第2次	平成22年4月19日～ 11月19日				
(24)	番久遺跡		平成20年7月28日～ 12月25日	庄原市口和町大月字 番久 庄原市口和町大月字 原畑	縄文時代 ～古墳時代	集落跡 陥穴	
	原畑遺跡				弥生時代 ～古墳時代	集落跡	
(25)	向泉川平1号遺跡		平成20年7月21日～ 7月11日	庄原市口和町向泉字 川平	旧石器時代 ～縄文時代	遺物包 含地	
	向泉川平2号遺跡				弥生時代 ～古墳時代	集落跡	
(26)	石谷2号遺跡	第1次	平成21年11月4日～ 12月26日	庄原市口和町金田字 塩谷	縄文時代	陥穴	
		第2次	平成22年4月13日～ 9月18日				
	石谷3号遺跡		平成21年11月4日～ 12月26日				古墳時代後期
(27)	馬ヶ段遺跡		平成20年4月14日～ 6月27日	庄原市水越町字馬ヶ 段 庄原市水越町字皇塩	古墳時代 ～平安時代	集落跡	
	皇塩遺跡				平安時代	炭窯跡	
(28)	三重1号遺跡	第1次	平成20年11月4日～ 12月26日	三次市四拾貫町字三 重	古墳時代 ～古代	集落跡	
		第2次	平成21年4月13日～ 9月18日				古墳時代中期
(29)	宮の本第20～26・31・32号古墳		平成19年4月16日～ 12月21日	三次市向江田字宮 本・天神	古墳時代前期 ～後期	古墳	

第1表の報告書

- (1) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』2005年
- (2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) 曾川1号遺跡(A～D地区)』2006年
- (3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 池ノ奥古墳』2007年
- (4) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4) 城根遺跡 曾川1号遺跡(E地区) 牛の皮城跡(第4次)』2008年
- (5) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) 曾川1号遺跡(G～J地区)』2008年
- (6) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(6) 曾川1号遺跡(K地区)』2008年
- (7) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(7) 礼場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』2009年
- (8) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8) 北野山遺跡』2009年
- (9) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(9) 向江田中山遺跡』2010年
- (10) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(10) 権現第1～3号古墳』2010年
- (11) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(11) 大番池第1～3・7号古墳』2010年
- (12) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(12) 茶臼古墳』2011年
- (13) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(13) 瀬戸越南古墳』2011年
- (14) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(14) 上陣遺跡』2011年
- (15) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(15) 和知白鳥遺跡I(旧石器時代の調査)』2011年
- (16) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(16) 曲第2～5号古墳』2011年
- (17) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(17) 家ノ城跡(第1～5次)』2012年
- (18) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(18) 片野中山第9～12号古墳・右谷遺跡』2012年
- (19) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(19) 和知白鳥遺跡(第1次)』2012年
- (20) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(20) 段遺跡(第1・2次)』2012年
- (21) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(21) 川平第1号古墳・常定川平1号遺跡・常定川平2号遺跡』2012年

- (22) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (22) 稲干場遺跡・稲干場第2～4・11号古墳』 2012年
- (23) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (23) 只野原1号遺跡・只野原2号遺跡・只野原3号遺跡』 2013年
- (24) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (24) 番久遺跡・原畑遺跡』 2013年
- (25) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (25) 向泉川平1号遺跡・向泉川平2号遺跡』 2013年
- (26) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (26) 石谷2号遺跡・石谷3号遺跡』 2013年
- (27) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (27) 馬ヶ段遺跡・皇塩遺跡』 2013年
- (28) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (28) 三重1号遺跡』 2013年
- (29) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (29) 宮の本第20～26・31・32号古墳』 2013年



第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線図 ※(1)～(29)は報告書番号

II 位置と環境

石谷2号遺跡・石谷3号遺跡は、広島県庄原市口和町金田字塩谷に所在する。口和町はかつて比婆郡に属していたが、平成17(2005)年に旧庄原市及び比婆郡5町(口和・西城・高野・東城・比和)、甲奴郡1町(総領)が合併し庄原市に含まれている。

庄原市は広島県の北東部に位置し、東には岡山県、北には鳥取県や島根県と接し、西から南にかけては三次市や府中市、南東では神石郡神石高原町と接している。また、庄原市は中国山脈の南側にあたり、北に高く南に低い地勢である。市の西部にあたる口和町においても、北部に釜峯山(788m)、笠尾山(1,019m)、八国見山(845m)、野呂山(844m)などの山々が連なり、この北部山地に源を発する藤根川、湯木川が南流し、宮内川と竹地谷川が合流して萩川となり、それぞれ西城川に流れ込んでいる。

口和町内には数多くの遺跡が存在し⁽¹⁾、これまでに常定1号・2号横穴⁽²⁾、常定峯双遺跡群⁽³⁾、池津第1号古墳⁽⁴⁾、金田第2号古墳⁽⁵⁾、金田石谷製鉄遺跡⁽⁶⁾で発掘調査が行われている。また近年では、中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴い、平成19年に曲第2～5号古墳⁽⁷⁾、稲干場第2～4・9号古墳⁽⁸⁾、平成20年に向泉川平1号・2号遺跡⁽⁹⁾、川平第1号古墳⁽¹⁰⁾、常定川平1号・2号遺跡⁽¹⁰⁾、番久遺跡⁽⁹⁾、原畑遺跡⁽⁹⁾、平成21年に石谷2号遺跡A地点・石谷3号遺跡、平成22年に石谷2号遺跡B地点の調査が行われている。

旧石器時代の遺跡としては、向泉川平1号遺跡がある。遺跡は萩川東側の低丘陵上に立地し、遺跡の中・下層で後期旧石器時代、上層で縄文時代の遺構と遺物が確認されている。下層では後期旧石器時代前半期の遺物集中部7ヶ所と配石5基が確認され、一定期間の生活が行われたことを示すものと考えられている。中層からも後期旧石器時代後半期と推定される遺物集中部が1ヶ所確認されている⁽⁹⁾。

縄文時代になると、町内各地で遺物が採集されている。最古のものとしては、宮内船谷で採集された表面にヘナタリ条痕の残る縄文時代後期前半の土器片がある⁽¹¹⁾。その他、湯木川上流域の伊与谷では後期後半から晩期の土器片が採集されている⁽¹¹⁾。昭和39(1964)年に行われた湯木の王子塚古墓の発掘調査では、縄文時代晩期の突帯文土器片が採集されている⁽⁹⁾。石器については、伊与谷で上記の縄文土器とともに磨製石斧が採集されたほか⁽¹¹⁾、船谷の宮内川や下金田の湯木川下流でも磨製石斧が見つかっており、これらは上流から流れてきた可能性がある⁽⁴⁾。特殊なものとしては、西日本では出土例の少ない独結石が大月地区から見つかっている。この独結石は何らかの儀式に用いられたと考えられる石器で伴出した土器片から縄文時代晩期と推定されている⁽⁹⁾。

また、近年の発掘調査では縄文時代の遺構も検出されている。向泉川平1号遺跡では、住居跡は確認されていないが遺物集中部4ヶ所と集石遺構5基が確認され、縄文時代前期の集落跡と推測されている。遺物集中部には、径6～9mのほぼ楕円形の範囲に、廃棄された土器片や石器、石器製作に伴う剥片が分布している。また、集石遺構には、拳大～乳児頭大の焼けた流紋岩の礫



第2図 周辺主要遺跡分布図(1:50,000)

- | | | | | |
|----------------------|-------------|-------------|----------|------------|
| 1 石谷2号遺跡 | 2 石谷3号遺跡 | 3 石谷遺跡 | 4 金田古墳群 | 5 金田石谷製鉄遺跡 |
| 6 曲古墳群 | 7 塩谷遺跡 | 8 堂前古墳群 | 9 どんで古墳 | 10 迫山古墳 |
| 11 常定横穴群 | 12 峯双横穴群 | 13 峯双遺跡 | 14 中野谷窯跡 | 15 峯双窯跡 |
| 16 峯双製鉄遺跡 | 17 川西古墳群 | 18 池津古墳群 | 19 伊与谷遺跡 | 20 下日南横穴 |
| 21 空山遺跡 | 22 黒岩城跡 | 23 稲干場古墳群 | 24 原畑遺跡 | 25 番久遺跡 |
| 26 向泉川平1号遺跡・向泉川平2号遺跡 | 27 常定川平1号遺跡 | 28 常定川平2号遺跡 | 29 川平古墳群 | |

が数点寄せ集められ、礫の多くが赤く焼けていることから、「石蒸し料理」などに使用された可能性が考えられる⁶⁹⁾。その他、常定川平2号遺跡では丘陵上に4基の土坑が検出され、うち1基から磨消縄文を施した縄文時代後期初頭の土器片が出土している。これらの土坑は規模・形態および配置などから陥穴と考えられている¹⁰⁾。

弥生時代のものとしては、上記の湯木王子塚古墳から採集された弥生時代前期の土器片があり、口縁直下にへら描き沈線がめぐらされている。これに続く弥生時代中期後半の土器片が湯木の伊与谷や王子塚古墳の付近から採集され、ともに「塩町式土器」の特徴を持つ甕の一部である⁶³⁾。弥生時代後期になると、大月地区で平成19年に発掘調査が行われた稲干場第2～4・9号古墳のうち、第2号古墳の調査区内から竪穴住居跡1軒、土坑3基が検出され、住居跡と土坑1基から弥生時代後期の壺の口縁部片が出土している。竪穴住居跡は2本柱で、平面形は隅丸方形である。土坑は3基とも、平面形が東西方向に長い隅丸長方形で、形状から墓坑の可能性が高い⁶⁸⁾。

向泉地区で平成20年に調査が行われた向泉川平2号遺跡では、弥生時代後期後半の竪穴住居跡1軒が検出されている。竪穴住居跡は2本柱の円形住居で、住居内から炭化した柱材などが出土しており、焼失したものと考えられる⁶⁹⁾。また、大月地区で平成20年に調査が行われた原畑遺跡は主として古墳時代前半期の集落遺跡であるが、弥生時代後期と考えられる円形の竪穴住居跡4軒も確認されている。この遺跡からは、その他にも住居を拡張する過程で平面形が隅丸方形から方形に変化する竪穴住居跡1軒も検出され、これは弥生時代中期から古墳時代前半期までの長期間にわたる住居であることが確認されている⁶⁹⁾。

古墳時代になると遺跡数は増加し、古墳をはじめ住居跡や窯跡などさまざまな遺跡の存在が確認されている。住居跡としては、これまでも常定の峯双遺跡、向泉の空山遺跡、湯木の本郷遺跡などが知られていたが⁶²⁾、近年の発掘調査によって、集落遺跡としてまとまった数の住居跡が検出されるようになった。前述の原畑遺跡では、竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡3棟、土坑7基などが確認され、原畑遺跡とあわせて発掘調査の行われた番久遺跡では竪穴住居跡4軒、土坑24基などが確認されており、竪穴住居が古墳時代中期前半に属することから、両遺跡は一つの集落を構成していたと考えられる⁶⁹⁾。なお、原畑遺跡からは剣形石製模造品も出土している¹¹²⁾。また、常定川平1号遺跡では、低丘陵の尾根線上のゆるやかな斜面に竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟などが検出されている。竪穴住居跡1軒は焼失家屋で垂木とみられる炭化材が出土しており、7世紀初め頃の住居跡と考えられる¹⁰⁾。

古墳は約150基が確認されているが、その大部分は古墳時代後期のもので、萩川流域の常定・大月・向泉地区と、湯木川流域の金田・石谷・永田・湯木地区に集中する傾向を示している⁶⁹⁾。大部分は円墳であるが、なかには前方後円墳も含まれる。前方後円墳には川西2号古墳、七塚7号古墳、金田第4号古墳などがあり、このうち川西第2号古墳はこの地域で最大規模の古墳で、全長23mで墓石の存在も想定されている⁶⁹⁾。古墳時代前期の古墳の埋葬施設については、池津第2号古墳、七塚第5・6・8号古墳などが箱式石棺として知られるほか、木棺直葬の可能性の強い追田山古墳などの例もある⁶⁴⁾。近年の発掘例としては、平成19年に発掘調査の行われた金

田の曲第2～5号古墳がある。このうち曲第2号古墳は直径約13mの円墳で、土坑内に組合式木棺を納め、両端の小口に礫群を詰めて裏込めとしている。古墳からは木棺内に置かれていたと推察される短甲と刀や短刀が出土した。曲第3号古墳は直径約6mの小規模な円墳で、埋葬施設は箱式石棺である。曲第4・5号古墳もこれと同様な小規模な円墳であるが、埋葬施設は不明である。築造は曲第2号古墳が5世紀末で、曲第3～5号古墳も同時期と推測されている⁽⁷⁾。その他、稲干場第2～4・9号古墳は、直径約9～12mの円墳であり、埋葬施設は第2～4号古墳が土坑、第9号古墳が箱式石棺である。築造は6世紀前半頃と推定されている⁽⁸⁾。

古墳時代後期の古墳としては、玄室と羨道の区別が明らかでない退化した横穴式石室を埋葬施設にもつものが多いが、高瀬古墳、七塚第2号古墳、どんで古墳、堂の前古墳のように片袖式の石室の古墳もみられる⁽⁹⁾。昭和53年に調査された池津第1号古墳は直径約12.8mの円墳で、石室の規模が全長8.65m、高さ1.76mで、この地域では最大である。出土した須恵器から6世紀後半のやや新しい時期に築造され、7世紀前半にかけて追葬が行われたと想定されている⁽⁶⁾。平成10年に調査された金田第2号古墳は直径約15mの円墳であり、長さ約5.3mの無袖式の石室を有する。石室内から多くの遺物が出土し、閉塞石前の墓道からも須恵器が二段に重ねられた状態で数点出土した。また、入口部の左右には墳丘斜面に石で台を造り、須恵器の大甕が据えられていた。築造は6世紀末から7世紀初頃頃と考えられている⁽⁵⁾。平成20年に発掘調査が行われた常定の川平第1号古墳は周溝の一部の調査にとどまるが、墳頂部に埋葬施設をもつ可能性のある6世紀後半頃の古墳と考えられる⁽¹⁰⁾。

その他注目されるのは、出雲地方を中心に山陰に分布する横穴墓がみられることである。現在、町内では常定で8基、湯木の明正寺裏で7基、向泉の下日南で1基が確認されている。このうち、常定第1・2号横穴の調査が昭和33年に⁽²⁾、峯双第1～6号横穴の調査が昭和39年に⁽³⁾行われている。横穴墓は、ほとんどが切妻式家形構造の簡略化した妻入り両袖式の平面形態をとり、アーチ状の天井部を有する。羨道部には石積みを行い、天井部を架構したものもみられる。これらの横穴墓は、出土した須恵器などから6世紀末～7世紀頃の造営とみられ、出雲文化の影響を示すものと考えられる⁽²⁾⁽³⁾。

また、峯双横穴群の周辺では、須恵器や鉄の生産に関わる遺跡も見つかっている。須恵器の窯跡は、峯双と中野谷で確認されている。峯双窯跡は林道工事の際や峯双第2号横穴の構築によって大半が破壊されていたが、地下式の登窯である。中野谷窯跡は、峯双窯跡から約500m離れて南北方向に延びる支谷の開墾された東斜面にある。窯跡の構造は明らかではないが、多量の須恵器片や窯壁などが散布しており、6世紀後半に比定されている⁽³⁾。また、峯双窯跡に近接して峯双製鉄遺跡があり、古墳時代～古代の製鉄遺構と考えられる⁽¹³⁾。こうした生産遺構や横穴墓の存在は、当時この地域にあった集団の生業や出自を考える上で重要な手がかりになるものと考えられる。

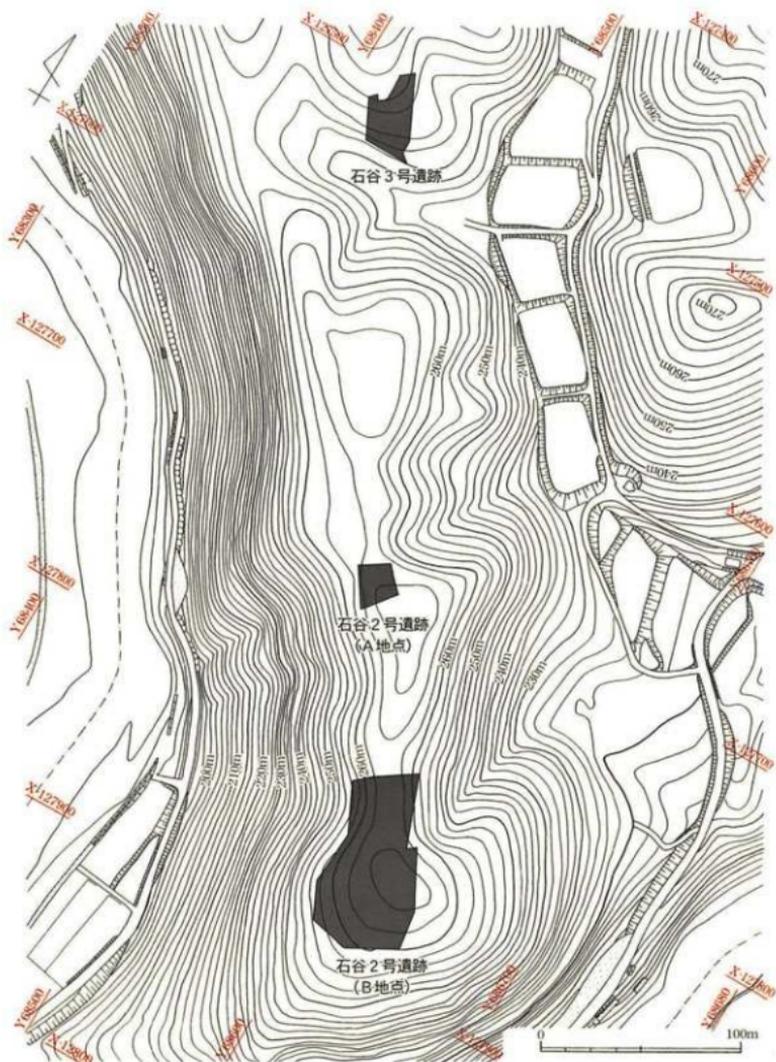
古代の律令制下では、口和町域は比和・高野の二か町と庄原市西北部とともに備後国^{備後}恵蘇郡に属した。平安時代初期に編纂された『和名類聚抄』には、恵蘇郡には恵蘇^{おほそ}・刑部^{おすべ}・春日部^{かすかべ}の三郷

のあったことがみえ、このうち「刑部」「春日部」は畿内の有力氏族などと関係の深い郷名とされている⁽¹⁴⁾。平城京出土木簡や文献史料によると、備後北部の諸郡では、絹糸の代わりに鉄や鋳を調として都に貢納していたことがみえる⁽¹⁵⁾。口和町内でも、奈良～平安時代の製鉄炉跡である金田石谷製鉄遺跡の発掘調査が行われており⁽⁶⁾、上記の峯双製鉄遺跡の存在も考えあわせると、この地域でも古くから鉄生産の盛んであったことがうかがわれる。

中世以降の発掘調査例はないが、町内には中世の城跡が多く存在している。大月の黒岩城跡は、大永～文禄年間（1521～1592）にかけて、この地域を支配した泉氏の山城である。この山城の近くでは、山陰の尼子氏と山陽の毛利氏が天文22（1553）年に激戦を繰りひろげ、城主の泉氏は毛利方につき勝利した（泉合戦）。当時の地方は、尼子氏と毛利氏との争いの最前線にあたり、黒岩城は政治的・軍事的にきわめて重要な拠点であった。

註

- (1) 遺跡名については、広島県教育委員会ホームページ「広島県遺跡地図」に記載された名称による。
- (2) 潮見 浩『備後口和村常定の横穴発掘調査』『古代吉備』第3集 古代吉備研究会 1959年
- (3) 広島県教育委員会「常定峯双遺跡群の発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第7集 1967年
- (4) 広島県比婆郡口和町教育委員会『池津第1号古墳発掘調査報告書』1979年
- (5) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『金田第2号古墳発掘調査報告書』1999年
- (6) 広島大学大学院文学研究科考古学研究室『金田石谷製鉄遺跡』2003年
- (7) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（16）曲第2～5号古墳』2011年
- (8) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（22）稲干場第2～4・9号古墳』2012年
- (9) 財団法人広島県教育事業団 広島県立歴史民俗資料館『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告会—資料—』2009年
- (10) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（21）川平第1号古墳 常定川平1号遺跡 常定川平2号遺跡』2012年
- (11) 塩見浩『備後口和町湯木伊与谷出土の縄文式土器』（『古代吉備』第5集）1963年
- (12) 剣形石製模造品は古墳時代中期に盛行し、祭祀に関わるものと考えられ、現在県内では5例を数える。
（財団法人広島県教育事業団『平成22年度ひろしまの遺跡を語る 古墳時代の暮らしと心 記録集』2011年）
- (13) 安間拓巳『日本古代鉄器生産の考古学的研究』淡水社 2007年
- (14) 口和町教育委員会『口和町誌』2000年
- (15) 平城京出土の木簡としては「備後國三上郡調銀壹拾口天平十八年」「三上郡信敷郷調十口」などがある。
また、文献史料には『類聚三代格』延暦廿四（805）年十二月七日大政官奏 がある。いずれも広島県『広島県史』古代中世資料編Ⅰ 1974年 による。



第3圖 周辺地形圖 (1:2,500)

III 石谷2号遺跡

1 調査の概要

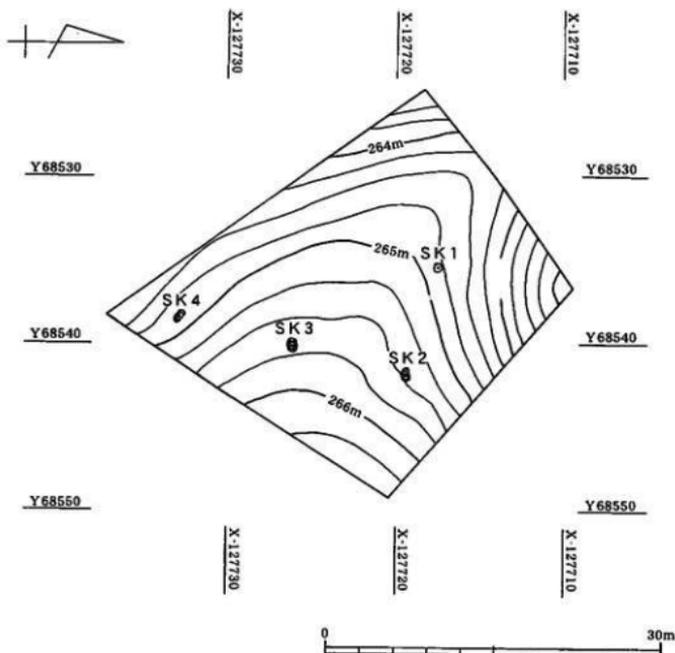
(1) 立地と調査前の状況

石谷2号遺跡は、庄原市口和町金田字塩谷に所在する。

本遺跡は北から南へ延びる低丘陵の先端部の尾根線上に立地する（標高256～266m）。低丘陵に沿って直下を西城川が「U」字状に蛇行しながら西流している。低丘陵の麓には西城川との間に水田が広がり、この水田と本遺跡との標高差は63～72mである。本遺跡の約230m北側には、東から貫入する侵食谷を隔てた北側の南斜面に石谷3号遺跡が立地する。

(2) 調査の概要

石谷2号遺跡は平成21～22年の2次にわたる発掘調査を行った。



第4図 A地点遺構配置図(1:300)

平成21年度は、丘陵の尾根線上の緩斜面（標高263～266m）にあるA地点を調査した。調査面積は400㎡である。調査区の中央部から南側にかけて土坑4基（SK1～SK4）を検出した。翌年に、A地点の約85m南側の丘陵尾根の先端頂部及び西～南側の緩斜面（標高256～264m）にあるB地点を調査した。調査面積は2,800㎡である。土坑41基（SK5～SK45）、その他の遺構3（SX1～3）を検出した。いずれの調査区も基本的な土層は、①表土、②黒褐色粘質土、③暗褐色粘質土、④暗黄褐色粘質土、⑤黄褐色粘質土、⑥黄色砂質土、⑦にぶい黄褐色粘質土、⑧固い黄褐色土層で、遺構は④暗黄褐色粘質土の上面で検出した。

遺物は、A地点・B地点ともに出土していない。

2 遺構

(1) A地点

土坑

SK1（第5図，図版3）

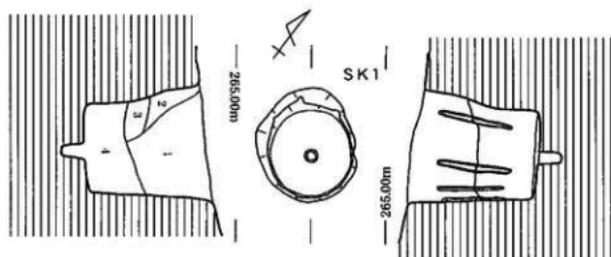
調査区の北側に位置し、丘陵の尾根線上の緩斜面に立地する（標高264.8m）。平面形は円形をなす。規模は、上端0.90×0.74m、下端0.70×0.63m、深さは1.02mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁際から中心部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央部には上端径10cm、深さ20cmのピットを掘り込む。なお、壁面中央には縦方向に長さ50～60cm程度、幅3～7cm程度の9条の溝を5～32cm間隔で掘り込んでいるが、その性格は不明である。

SK2（第5図，図版3）

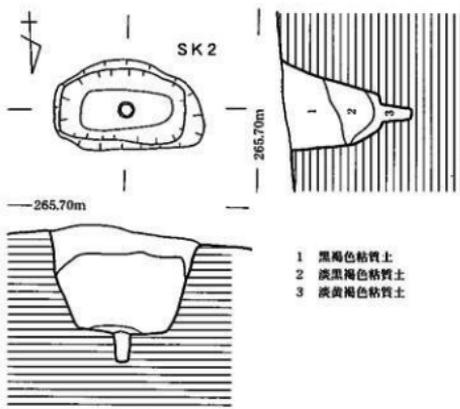
調査区の北東側に位置し、丘陵の尾根線上の緩斜面に立地する（標高265.5m）。平面形は隅丸長方形で、長軸の方位はN85°Wで等高線に斜交する。規模は、上端1.18×0.72m、下端0.70×0.32m、深さ0.87mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、南東から北西の壁際に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央部には上端径14cm、深さ24cmのピットを掘り込む。

SK3（第6図，図版3）

調査区の南東側に位置し、丘陵の尾根線上の緩斜面に立地する（標高265.7m）。平面形は隅丸長方形で、長軸の方位はN66°Wで等高線に直交する。規模は、上端1.16×0.70m、下端0.70×0.50m、深さ0.87mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、東から西の壁際に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径14×11cm、深さ26cmのピット1を掘り込む。



- 1 黒褐色粘質土
- 2 淡黒褐色粘質土
- 3 黄褐色粘質土
- 4 淡黒褐色粘質土



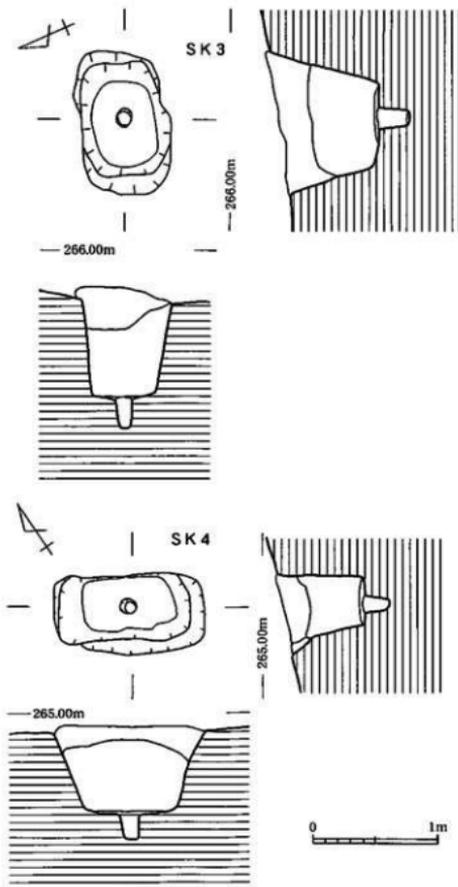
- 1 黒褐色粘質土
- 2 淡黒褐色粘質土
- 3 淡黄褐色粘質土



第5図 SK1・SK2実測図(1:40)

SK4 (第6図, 図版3)

調査区の南側に位置し、丘陵の尾根線上の緩斜面上に立地する(標高264.9m)。平面形は長方形で、長軸の方位はN56°Wで等高線に平行する。規模は、上端1.20×0.64m、下端0.73×0.42m、深さ0.70mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁際から中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径13cm×11cm、深さ20cmのピット1を掘り込む。



第6図 SK 3・SK 4実測図(1:40)

(2) B地点

土坑

SK 5 (第8図, 図版5)

調査区の北西際に位置し、丘陵の尾根線上の平坦面に立地する(標高262.1m)。平面形は楕円形で、長軸はN26°Wで等高線に平行する。規模は、上端1.52×1.20m、下端0.58×0.42m、深さ1.27mである。断面形は逆台形状を呈する。西側壁面に礫石(自然石)が露出している。底

面は北端が高さ8cm程度高く段状をなし、下段中央に上端径12cm、深さ15cmのビット1を掘り込む。

SK 6 (第8図, 図版5)

調査区の北西側に位置し、丘陵の西側斜面に立地する(標高261.3m)。平面形は不整な円形で、規模は、上端1.20×1.00m、下端0.80×0.60m、深さ1.02mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁際から中央部に向かってゆるやかに傾斜する。

SK 7 (第9図, 図版5)

調査区の北西側に位置し、丘陵の西側斜面に立地する(標高259.2m)。平面形は楕円形で、長軸の方位はN78°Eで等高線に直交する。規模は、上端1.54×1.24m、下端0.58×0.53m、深さ2.24mである。掘り方は上端から0.9m程度の深さまで斜めに、以下底面までほぼ垂直に掘り込み、断面形は漏斗状を呈する。東側壁面に礫石(自然石)が露出している。底面はほぼ平坦で、壁際から中央部に向かってゆるやかに傾斜する。

SK 8 (第10図, 図版5)

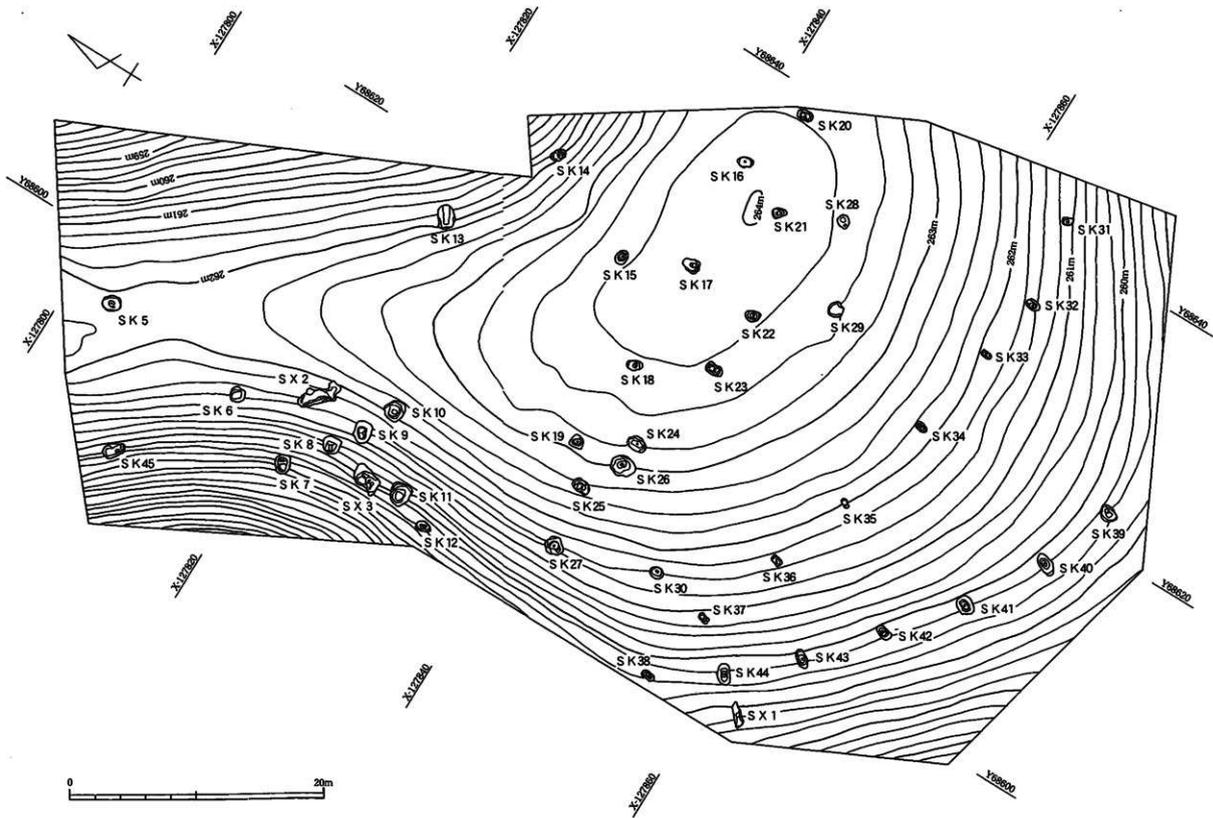
調査区の北西側に位置し、丘陵の西側斜面に立地する(標高260.3m)。平面形は不整な円形で規模は、上端1.56×1.46m、下端0.50×0.30m、深さ2.33mである。掘り方は上端から1.2m程度の深さまで斜めに、以下底面までほぼ垂直に掘り込み、断面形は漏斗状を呈する。底面はほぼ平坦である。

SK 9 (第11図, 図版6)

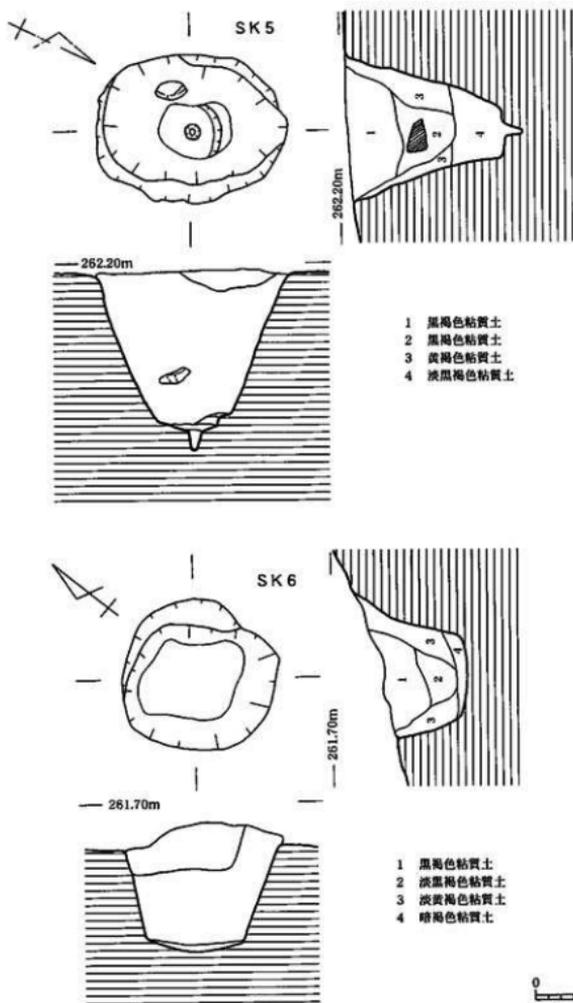
調査区の北西側に位置し、丘陵の西側斜面に立地する(標高261.2m)。平面形は不整な楕円形で、長軸の方位はほぼ東西方向を指し等高線に直交する。規模は、上端1.80×1.30m、下端0.46×0.36m、深さ2.62mである。掘り方は上端から1.0m程度の深さまでゆるやかに、以下底面まで垂直に近い傾斜で掘り込み、断面形は漏斗状を呈する。底面はほぼ平坦である。

SK 10 (第12図, 図版6)

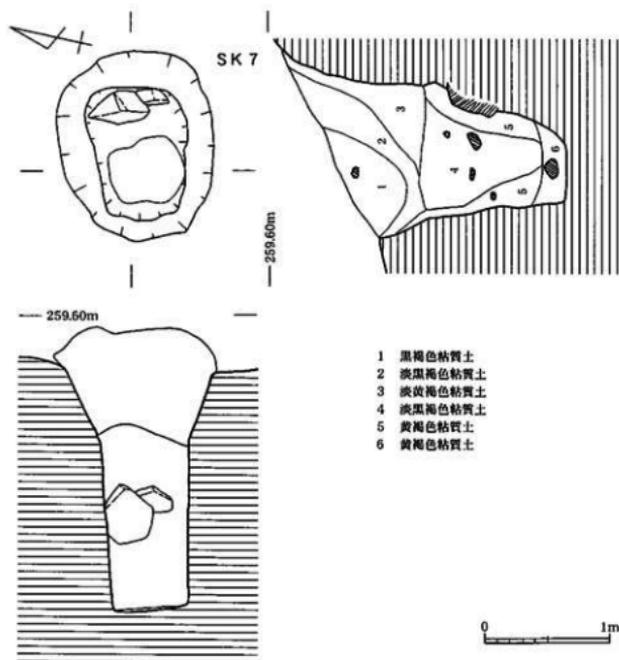
調査区の北西側に位置し、丘陵の尾根線上の西端に立地する(標高262.1m)。平面形はやや不整な円形をなす。規模は、上端1.70×1.50m、下端0.40m平方、深さ2.46mである。掘り方は上端から1.2m程度の深さまでややゆるやかに、以下底面までは垂直に近い急傾斜で掘り込み、断面形は漏斗状を呈する。西側壁面に礫石(自然石)が露出する。底面はほぼ平坦である。



第7图 B地点遺構記層図(1:300)



第8圖 SK5・SK6実測図(1:40)



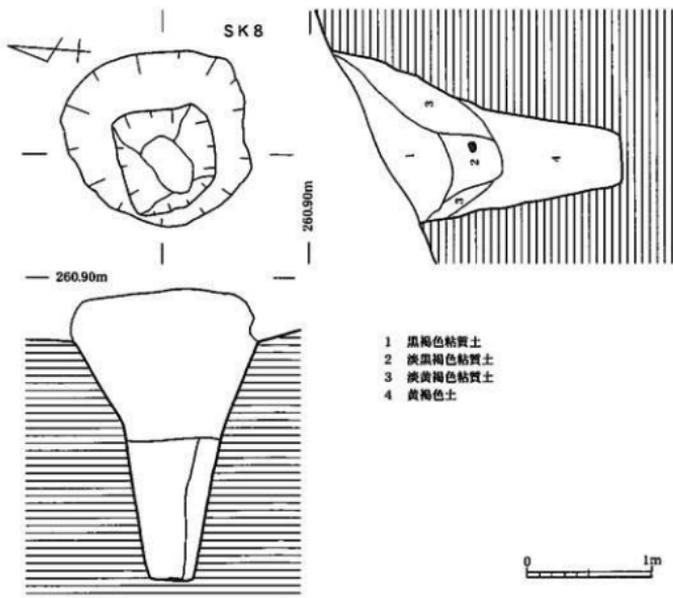
第9図 SK 7実測図(1:40)

SK 11 (第13図, 図版6)

調査区の北西側に位置し、丘陵の西側斜面に立地する(標高260.0m)。平面形は円形をなす。規模は、上端 1.80×1.58 m, 下端 0.70×0.56 m, 深さ2.50mである。掘り方は上端から1.1m程度の深さまでややゆるやかに、以下底面まで垂直に近い急傾斜で掘り込み、断面形は漏斗状を呈する。北側壁面に礫石(自然石)が露出している。底面はほぼ平坦である。

SK 12 (第13図, 図版6)

調査区の北西側に位置し、丘陵の西側斜面に立地する(標高259.6m)。平面形は楕円形で、長軸の方位は $N6^{\circ}E$ で等高線に斜交する。規模は、上端 1.12×0.77 m, 下端 0.48×0.30 m, 深さ1.10mである。断面形は逆台形状を呈する。底面は南半部がやや高く段をなし、北半部の下段に上端径 16×12 cm, 深さ22cmのピット1を掘り込む。



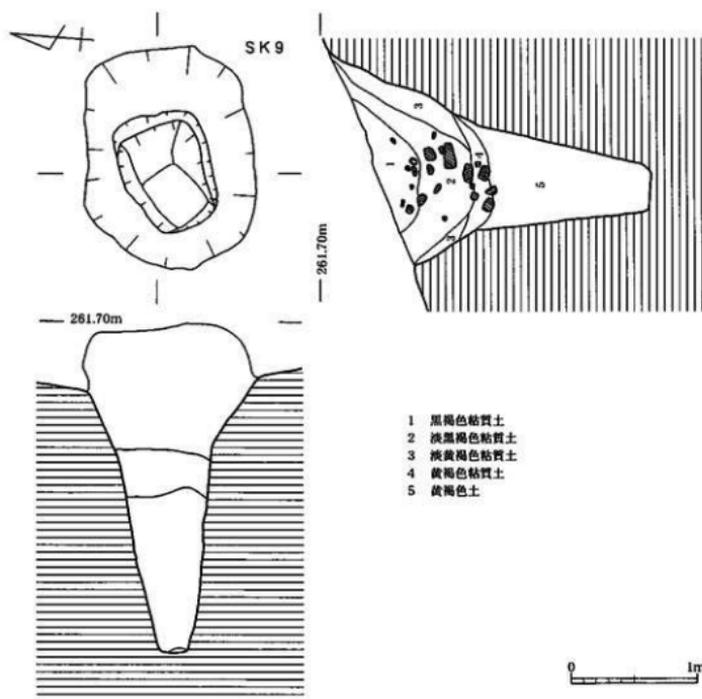
第10図 SK 8実測図(1:40)

SK 13 (第14図, 図版7)

調査区の北側に位置し、丘陵の尾根線上に立地する(標高261.8m)。平面形は隅丸長方形で、長軸の方位は $N 56^{\circ} E$ で等高線に直交する。規模は、上端 $1.88 \times 1.26m$ 、下端 $1.60 \times 0.50m$ 、深さ $1.64m$ である。断面形は逆台形状を呈し、北東側の壁面はややオーバーハング気味に掘り込む。底面は、南西と北東にかけてゆるやかに傾斜する。

SK 14 (第14図, 図版7)

調査区の北東側に位置し、丘陵の尾根頂部に近い斜面上に立地する(標高262.0m)。平面形は不整な楕円形で、長軸の方位は $N 44^{\circ} W$ で等高線に斜交する。規模は、上端 $1.30 \times 0.80m$ 、下端 $0.48 \times 0.40m$ 、深さ $1.10m$ である。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁際から中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面のやや西側に上端径 $14c \times 11cm$ 、深さ $27cm$ のピット1を掘り込む。



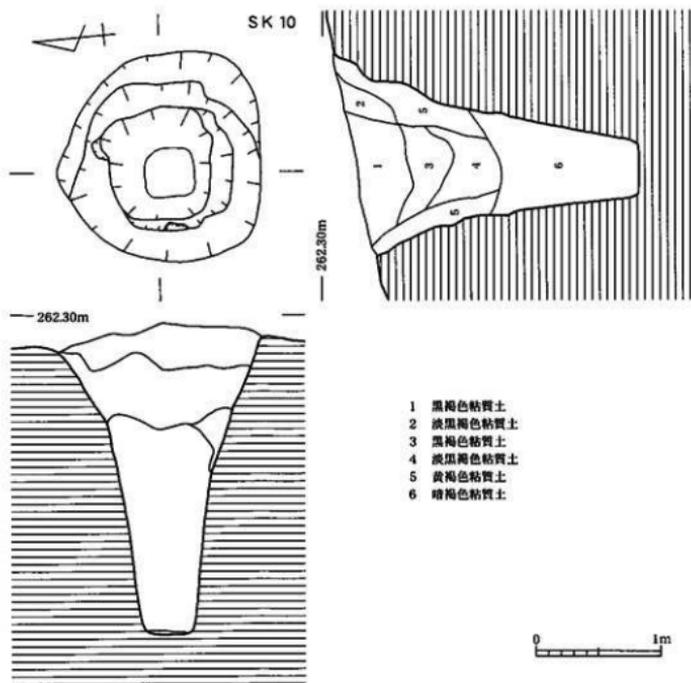
第11図 SK 9実測図(1:40)

SK 15 (第15図, 図版7)

調査区の北東側に位置し、丘陵の尾根頂部付近に立地する(標高263.7m)。平面形は楕円形で、長軸の方位は $N 28^{\circ} E$ で等高線に平行する。規模は、上端 1.20×0.90 m, 下端 0.40×0.36 m, 深さ1.07mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁際から中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径 12×10 cm, 深さ16cmのピットを掘り込む。

SK 16 (第15図, 図版7)

調査区の東側に位置し、丘陵の尾根頂部に立地する(標高263.9m)。平面形は隅丸長方形で、長軸の方位は $N 17^{\circ} W$ である。規模は、上端 1.06×0.72 m, 下端 0.92×0.63 m, 深さ0.76mである。掘り方は上端から0.2m程度の深さまで傾斜し、以下底面までほぼ垂直に下り、断面形

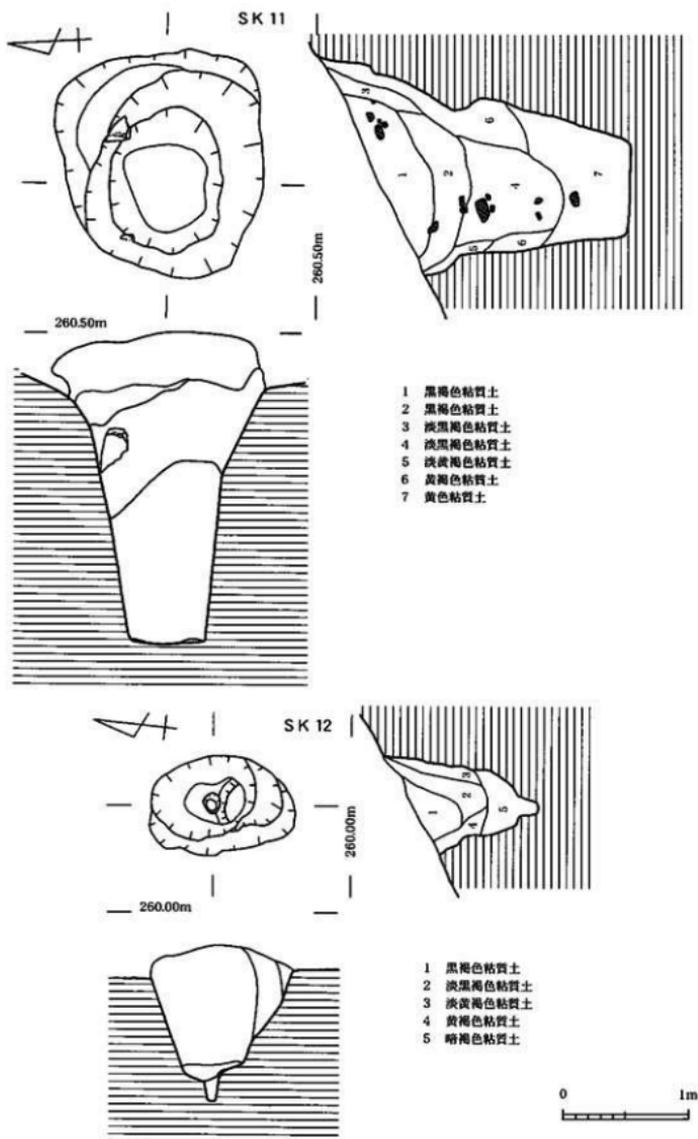


第12図 SK10実測図(1:40)

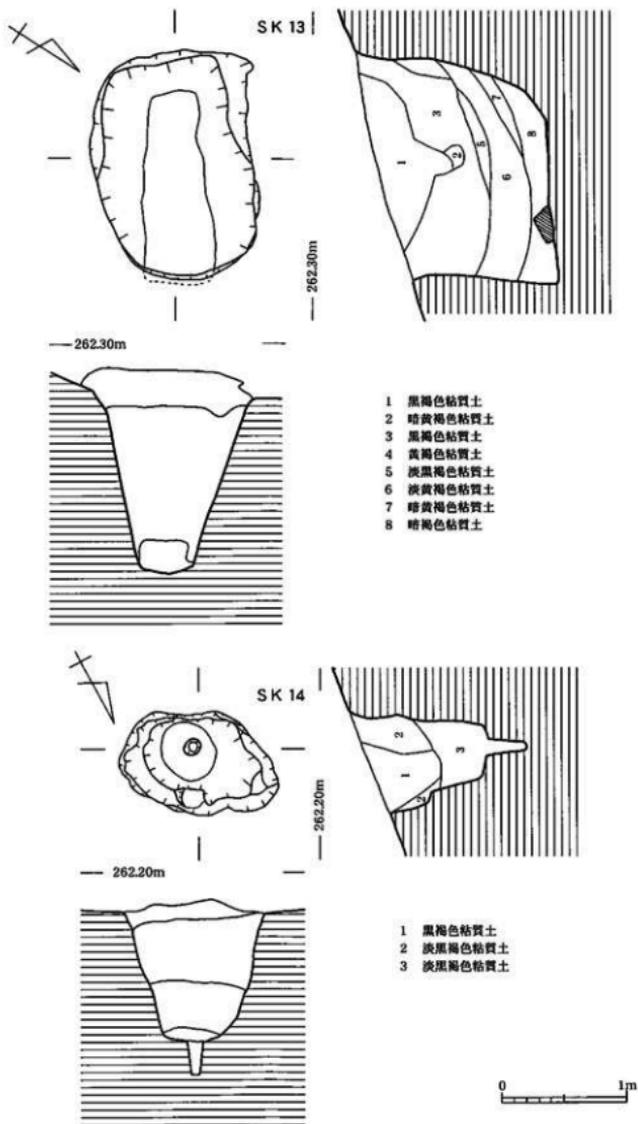
は長方形に近い。底面はほぼ平坦で、壁際から中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径 20×16 cm、深さ24cmのピット1を掘り込む。ピットから小礫が出土した。

SK 17 (第16図, 図版8)

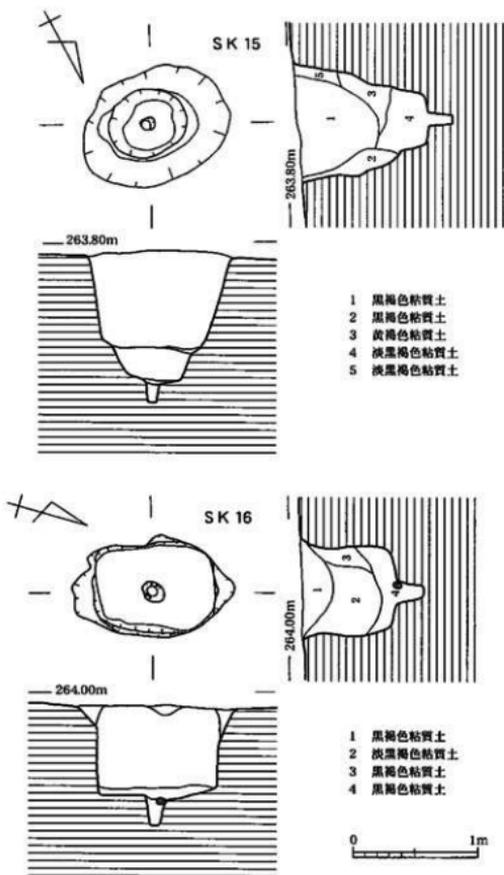
調査区の中央東寄りに位置し、丘陵の尾根頂部に立地する(標高264.0m)。平面形は隅丸長方形で、長軸の方位はほぼ南北方向をさす。規模は、上端 1.42×1.00 m、下端 0.54×0.36 m、深さ1.20mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁際から中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面上端径 20×18 cm、深さ28cmのピット1を掘り込む。



第13圖 SK 11·12 夷測圖 (1 : 40)



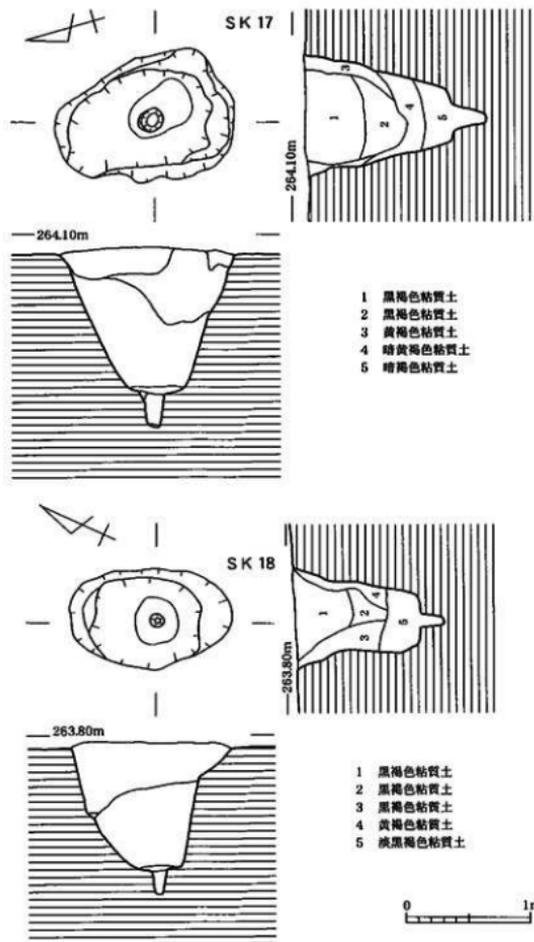
第14圖 SK 13·14實測圖(1:40)



第15図 SK 15・16実測図 (1:40)

S K 18 (第16図, 図版8)

調査区の中央部に位置し、丘陵の尾根頂部付近に立地する(標高263.7m)。平面形は楕円形で、長軸の方位はN 25° Wで等高線に平行する。規模は、上端1.30×0.80m、下端0.40×0.32m、深さ1.02mである。掘り方は南側の壁面が上端から0.2m程度の深さで屈曲して急傾斜となって底面まで下り、断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径10cm、深さ20cmのピット1を掘り込む。



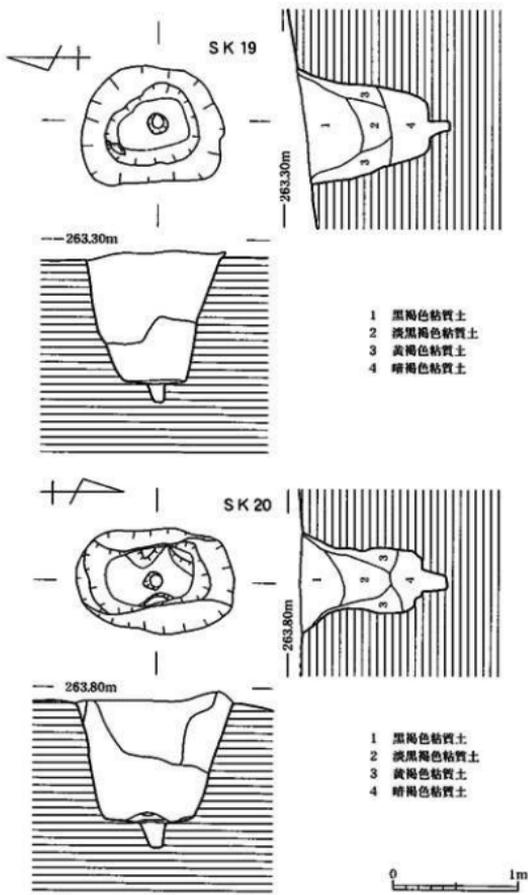
第 16 図 SK 17・18 実測図 (1:40)

SK 19 (第 17 図, 図版 8)

調査区の中央西寄りに位置し、丘陵の尾根頂部の西端に立地する(標高 263.2m)。平面形は隅丸長方形で、長軸の方位はほぼ南北方向をさし等高線に平行する。規模は、上端 1.12 × 0.94m、下端 0.56 × 0.37m、深さ 1.06m である。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径 12cm、深さ 15cm のビット 1 を掘り込む。

S K 20 (第17図, 図版8)

調査区の東際に位置し、丘陵の尾根頂部付近に立地する(標高263.7m)。平面形は隅丸長方形で、長軸の方位はほぼ南北方向をさし等高線に平行する。規模は、上端1.25×0.84m、下端0.70×0.46m、深さ1.00mである。断面形は、南北方向は概ね逆台形状を呈するが、東西方向は上端より40～60cm程度の深さのところまで幅が50cm程度に狭まり、以下やや広がって底面まで下る。底面は東と西の壁側の一部が5cm程度高く段をなし、下段はほぼ平坦で、中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径16×14cm、深さ20cmのビット1を掘り込む。



第17図 SK 19・20実測図(1:40)

S K 21 (第18図, 図版9)

調査区の東側に位置し、丘陵の尾根頂部に立地する(標高263.9m)。平面形は楕円形で、長軸の方位はN 35° Wである。規模は、上端1.10×0.60m、下端0.60×0.36m、深さ0.86mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央やや南寄りに上端径16cm、深さ23cmのピット1を掘り込む。

S K 22 (第18図, 図版9)

調査区の東側に位置し、丘陵の尾根頂部に立地する(標高263.8m)。平面形は楕円形で、長軸の方位はN 21° Wである。規模は、上端1.20×0.80m、下端0.56×0.36m、深さ0.84mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径14cm、深さ26cmのピット1を掘り込む。

S K 23 (第19図, 図版9)

調査区の中央部に位置し、丘陵の尾根頂部付近に立地する(標高263.7m)。平面形は隅丸長方形で、長軸の方位はほぼ南北方向をさし等高線に直交する。規模は、上端1.14×0.58m、下端0.56×0.28m、深さ0.90mである。断面形は逆台形状を呈する。底面は南側の壁際が4cm程度高く段をなし、下段はほぼ平坦で、中央に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径16×12cm、深さ22cmのピット1を掘り込む。

S K 24 (第19図, 図版9)

調査区の中央部西寄りに位置し、丘陵の尾根頂部付近に立地する(標高263.3m)。平面形で、長軸の方位はN 11° Wで等高線に平行する。規模は、上端1.30×0.80m、下端0.78×0.30m、深さ1.03mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径17×15cm、深さ25cmのピット1を掘り込む。

S K 25 (第20図, 図版10)

調査区の西側に位置し、丘陵の尾根頂部に近い西側斜面に立地する(標高262.7m)。平面形は楕円形で、長軸の方位はほぼ南北方向をさし等高線に平行する。規模は、上端1.18×0.74m、下端0.60×0.30m、深さ1.00mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径18×16cm、深さ21cmのピット1を掘り込む。

S K 26 (第20図, 図版10)

調査区の中央部に位置し、丘陵の尾根頂部付近に立地する(標高263.1m)。平面形は不整な楕円形で、長軸の方位はN 15° Wで等高線に平行する。規模は、上端1.60×1.25m、下端0.56

×0.46 m, 深さ1.28 mである。掘り方は北側の壁面が上端から0.4 m程度の深さで屈曲して急傾斜となって底面まで下り, 断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で, 中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径18×15 cm, 深さ26 cmのビット1があり, その南側は10 cm程度高く段状をなす。

S K 27 (第21図, 図版10)

調査区の東側に位置し, 丘陵の頂部に立地する(標高261.5 m)。平面形は不整な円形をなす。規模は, 上端1.60×1.47 m, 下端0.68×0.52 m, 深さ1.24 mである。掘り方は上端から0.6～0.7 m程度の深さで屈曲し, 以下底面まではほぼ垂直に掘り込んでおり, 断面形は漏斗状を呈する。底面はほぼ平坦で, 中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径17×15 cm, 深さ28 cmのビット1を掘り込む。

S K 28 (第21図, 図版10)

調査区の中央部に位置し, 丘陵の尾根頂部付近に立地する(標高263.7 m)。平面形はほぼ円形をなす。規模は, 上端1.08×0.94 m, 下端0.44×0.36 m, 深さ0.28 mで, 南西部はやや高く段状をなす。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で, 南西部から北東部に向かってゆるやかに傾斜する。

S K 29 (第22図, 図版11)

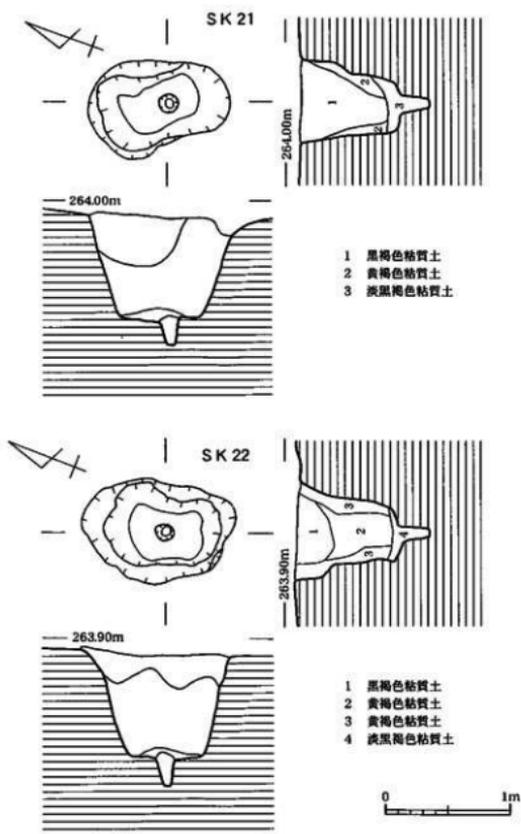
調査区の中央部に位置し, 丘陵の尾根頂部付近に立地する(標高263.6 m)。平面形は不整な円形をなす。規模は, 上端1.30×1.20 m, 下端1.10×0.93 m, 深さ0.30 mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で, 南西部から北東部に向かってゆるやかに傾斜する。

S K 30 (第22図, 図版11)

調査区の南西側に位置し, 丘陵の西側斜面に立地する(標高261.6 m)。平面形は楕円形で, 長軸の方向はN15°Wで等高線に平行する。規模は, 上端1.06×0.90 m, 下端0.80×0.56 m, 深さ0.80 mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で, 壁際から中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央にビット1を掘り込み, 上端径30×23 cm, 深さ27 cmである。ビットの中に小礫が見つかった。

S K 31 (第22図, 図版11)

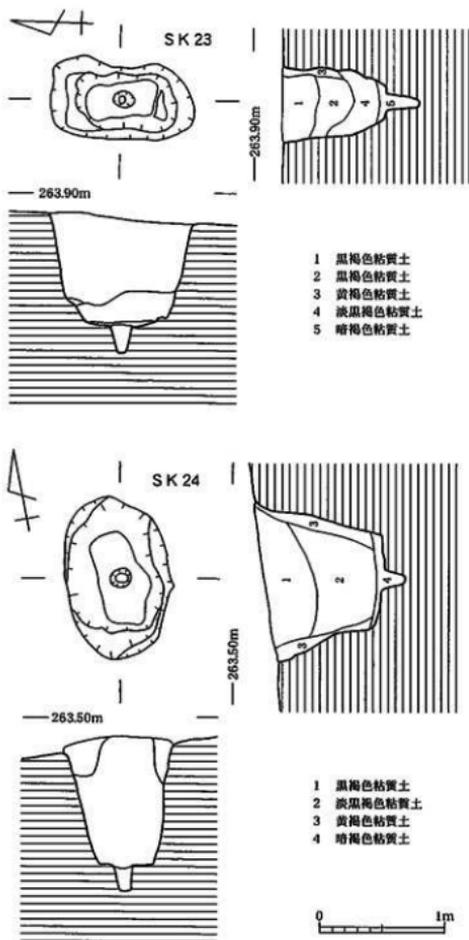
調査区の南東側に位置し, 丘陵の南側斜面に立地する(標高261.2 m)。平面形は隅丸長方形で, 長軸の方位はN13°Wで等高線に直交する。規模は, 上端0.90×0.56 m, 下端0.50×0.30 m, 深さ0.94 mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で, 壁際から中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径15 cm, 深さ23 cmのビットを掘り込む。



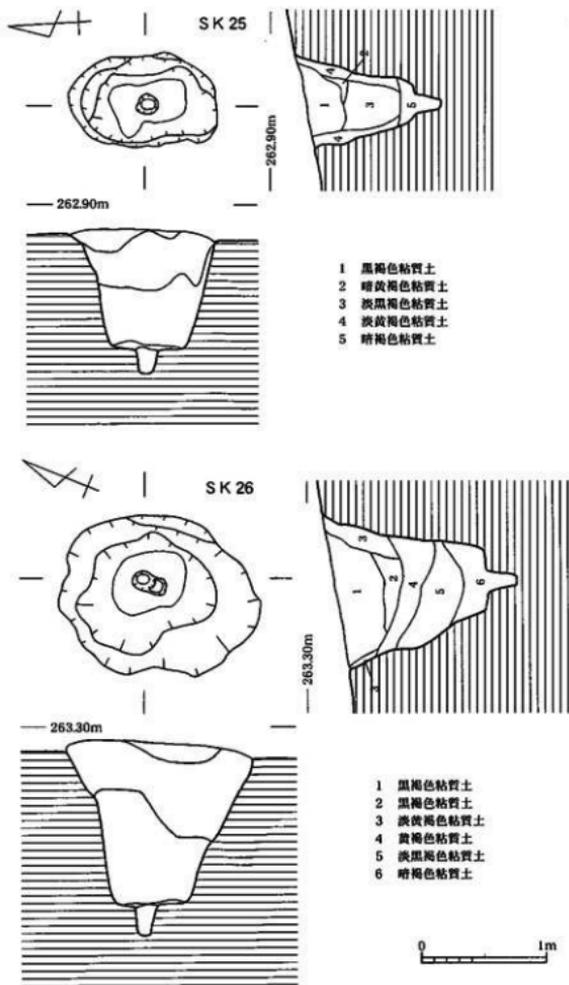
第18図 SK 21・22実測図(1:40)

S K 32 (第22図, 図版11)

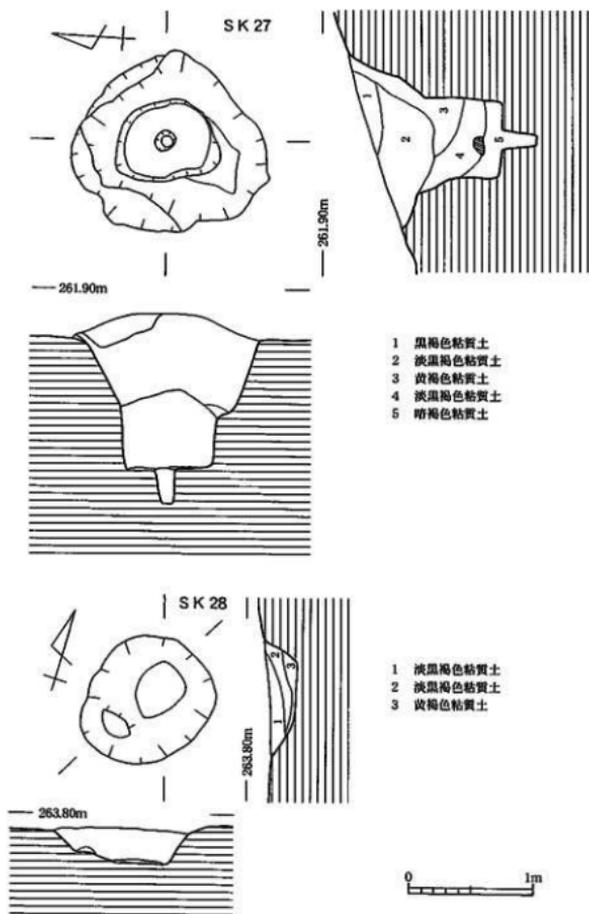
調査区の南東側に位置し、丘陵の南側斜面に立地する(標高261.7m)。平面形は楕円形で、長軸の方位は $N 10^{\circ} E$ で等高線に直交する。規模は、上端 1.20×0.73 m, 下端 0.57×0.30 m, 深さ1.00mである。断面形は逆台形状を呈するが、東西壁面では約0.4m程度の深さで屈曲して狭まり、以下ほぼ垂直に下る。底面はほぼ平坦で、壁際から中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面の中央西寄りに上端径19cm, 深さ25cmのピットを掘り込む。



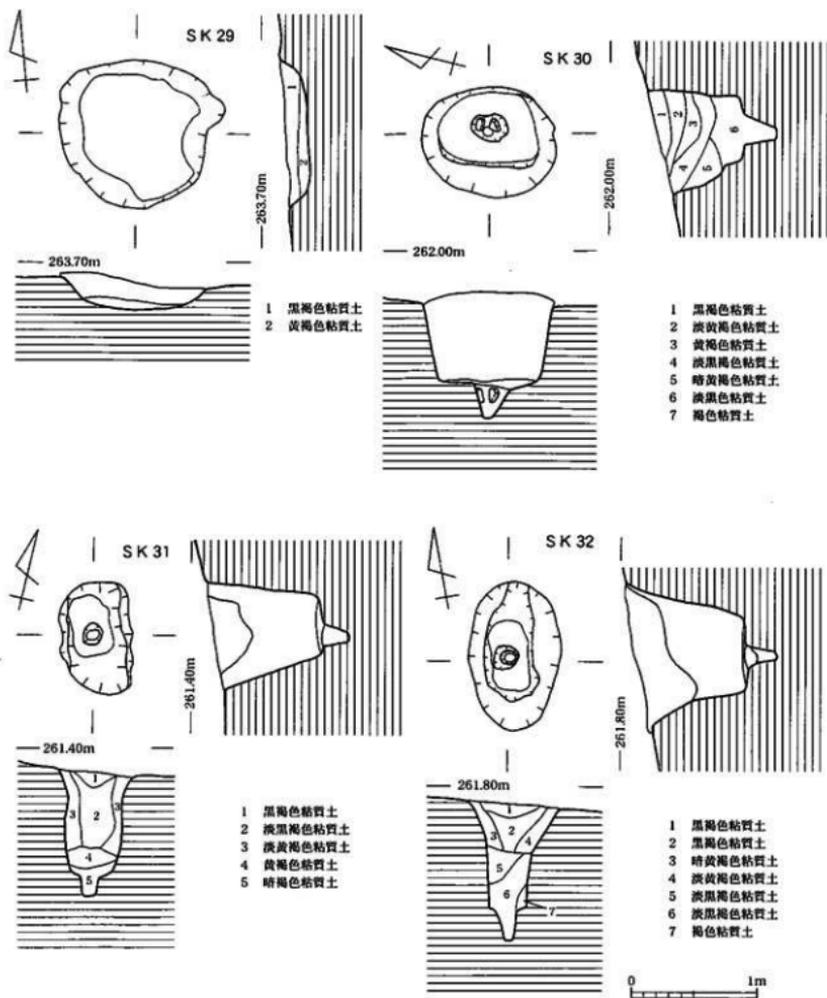
第 19 圖 SK 23·24 実測圖 (1:40)



第20圖 SK 25·26 實測圖 (1:40)



第21圖 SK 27・28夾測圖 (1:40)



第22圖 SK 29·30·31·32実測図(1:40)

S K 33 (第23図, 図版12)

調査区の南東側に位置し、丘陵の南側斜面に立地する(標高262.0m)。平面形は隅丸長方形で、長軸の方位はほぼ南北方向をさし等高線に直交する。規模は、上端 0.97×0.45 m、下端 0.65×0.24 m、深さ0.94mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁際から中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端 18×15 cm、深さ27cmのピット1を掘り込む。

S K 34 (第23図, 図版12)

調査区の南側に位置し、丘陵の南側斜面に立地する(標高262.3m)。平面形は隅丸長方形で、長軸の方位は $N 10^\circ E$ で等高線に直交する。規模は、上端 0.98×0.58 m、下端 0.56×0.27 m、深さ0.88mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、北部から南部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径 15×13 cm、深さ26cmのピット1を掘り込む。

S K 35 (第22図, 図版12)

調査区の南側に位置し、丘陵の南側斜面に立地する(標高262.2m)。平面形は隅丸長方形で、長軸の方位は $N 29^\circ E$ で等高線に直交する。S K 35は北東側の上端部を除く大半がトレンチで削平されているが、規模は、上端が推定 1.00×0.60 m程度で、下端 0.65×0.30 m、深さ0.95mである。底面はほぼ平坦で、壁際から中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央やや南東寄りに上端径 14×12 cm、深さ23cmのピット1を掘り込む。

S K 36 (第23図, 図版12)

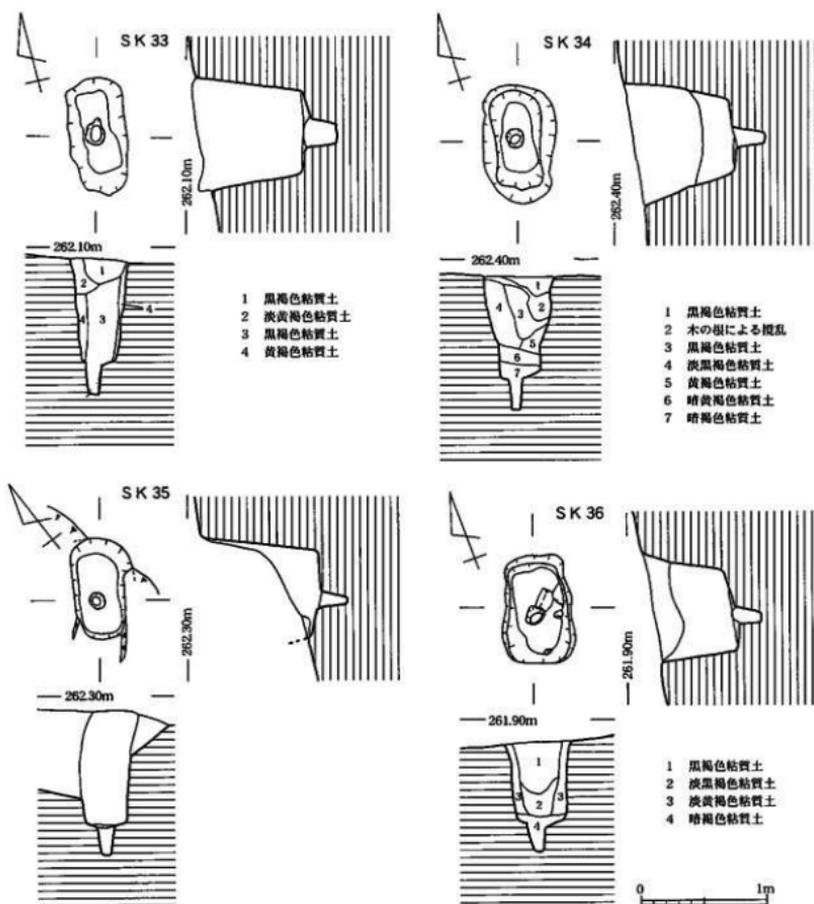
調査区の南西側に位置し、丘陵の南西側斜面に立地する(標高261.7m)。平面形は長方形で、長軸の方位は $N 15^\circ E$ で等高線に斜交する。規模は、上端 0.88×0.52 m、下端 0.70×0.36 m、深さ0.73mである。掘り方はほぼ垂直に近い傾斜で底面まで下る。底面は北東部から南西部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径 16×12 cm、深さ24cmのピット1を掘り込む。底部付近に礫石(自然石)が露出する。

S K 37 (第24図, 図版13)

調査区の南西側に位置し、丘陵の西側斜面に立地する(標高260.9m)。平面形は隅丸長方形で、長軸の方位は $N 18^\circ E$ で等高線に斜交する。規模は、上端 0.86×0.50 m、下端 0.62×0.30 m、深さ0.95mである。掘り方は底面までほぼ垂直に近く掘り込む。底面はほぼ平坦で、壁際から中央に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径15cm、深さ18cmのピット1を掘り込む。

S K 38 (第24図, 図版13)

調査区の南西側に位置し、丘陵の西側斜面に立地する(標高259.5m)。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸の方位はほぼ南北方向をさし等高線に平行する。規模は、上端 1.10×0.53 m、



第23圖 SK 33・34・35・36実測図(1:40)

下端 0.53×0.24 m、深さ 0.92 mである。掘り方は上端からゆるやかに傾斜し 0.2 m程度の深さで屈曲して以下底面まで垂直に近く掘り込む。底面はほぼ平坦で、壁際から中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径 14×12 cm、深さ 16 cmのビット1を掘り込む。

S K 39 (第24図, 図版13)

調査区の南側に位置し、丘陵の南側斜面に立地する(標高259.7m)。平面形は楕円形で、長軸の方位はN 23° Eで等高線に直交する。規模は、上端1.50×1.14m、下端0.72×0.40m、深さ1.25mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁際から中央に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径16×13cm、深さ22cmのピット1を掘り込む。

S K 40 (第25図, 図版13)

調査区の南側に位置し、丘陵の南側斜面に立地する(標高259.9m)。平面形は楕円形で、長軸の方位はN 29° Eで等高線に直交する。規模は、上端1.87×0.93m、下端0.58×0.37m、深さ1.38mである。掘り方は上端からゆるやかに傾斜し0.7m程度の深さでやや屈曲して急傾斜になり底面まで下る。底面はほぼ平坦で、壁際から中央に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径17cm、深さ28cmのピット1を掘り込む。

S K 41 (第25図, 図版14)

調査区の南側に位置し、丘陵の南側斜面に立地する(標高259.9m)。平面形は楕円形で、長軸の方位はN 20° Eで等高線に直交する。規模は、上端1.58×1.25m、下端0.70×0.38m、深さ1.20mである。掘り方は上端からゆるやかに傾斜し0.5m程度の深さでやや屈曲して急傾斜になり底面まで下る。底面はほぼ平坦で、壁際から中央に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端径17cm、深さ21cmのピット1を掘り込む。

S K 42 (第26図, 図版14)

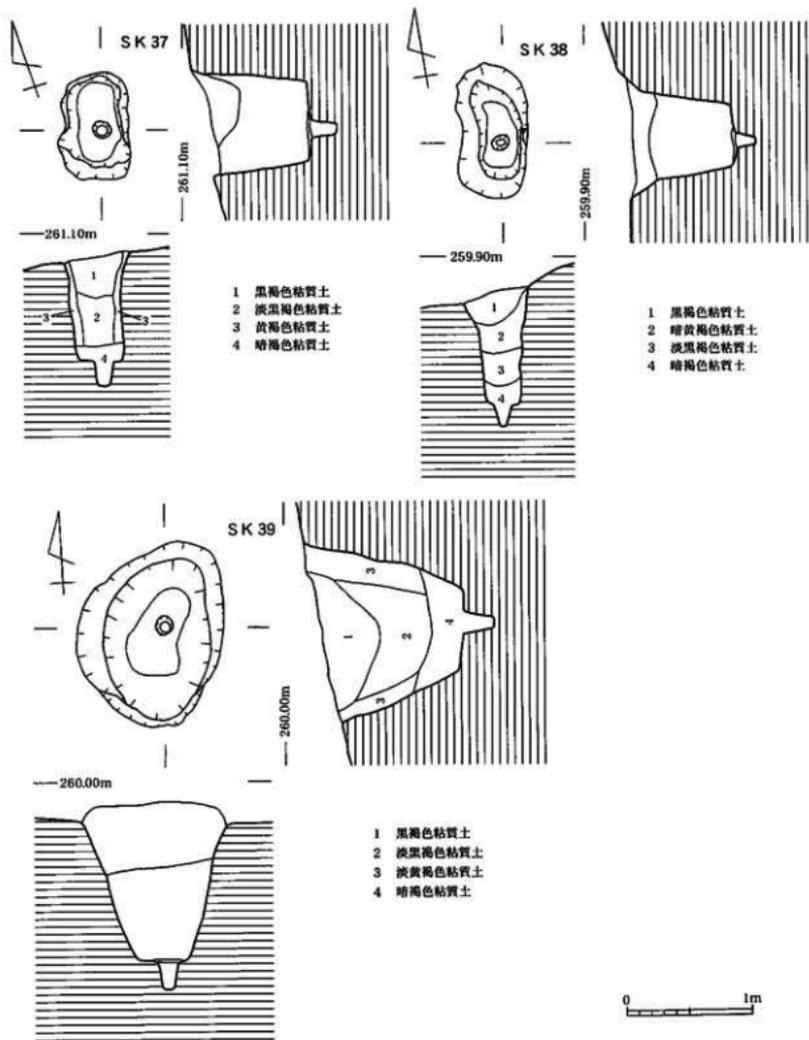
調査区の南西側に位置し、丘陵の南側斜面に立地する(標高260.0m)。平面形は楕円形で、長軸の方位はN 10° Eで等高線に直交する。断面形は逆台形状を呈する。規模は、上端1.37×0.78m、下端0.70×0.43m、深さ1.10mである。底面はほぼ平坦で、南半部がやや高く段状をなす。下段に上端径20×18cm、深さ29cmのピット1を掘り込む。

S K 43 (第26図, 図版14)

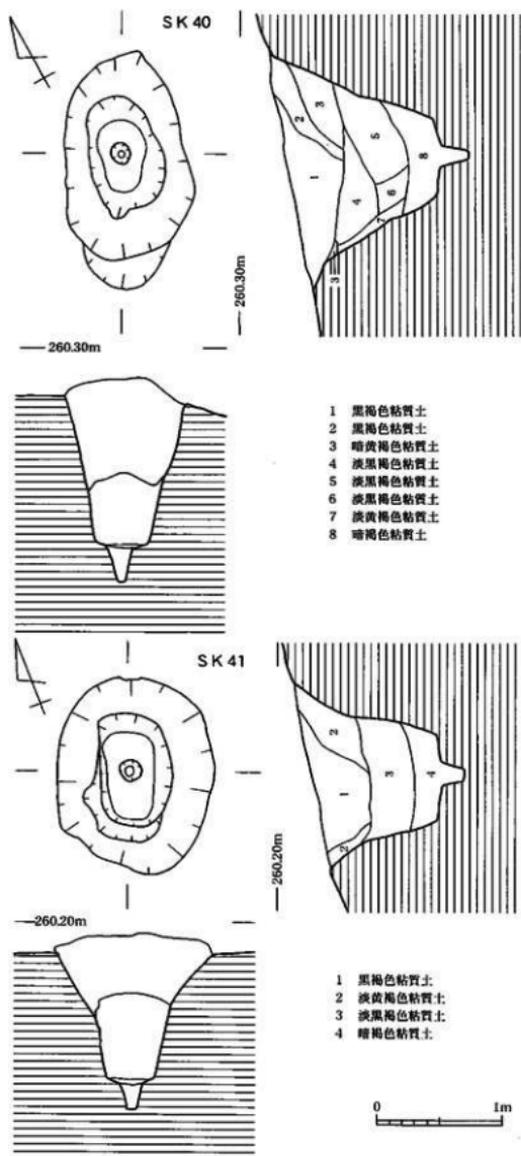
調査区の南西側に位置し、丘陵の南西側斜面に立地する(標高259.9m)。平面形は楕円形で、長軸の方位はN 40° Eで等高線に直交する。規模は、上端1.54×0.78m、下端0.67×0.40m、深さ1.16mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、北東部から南西部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端21×15cm、深さ27cmのピット1を掘り込む。

S K 44 (第27図, 図版14)

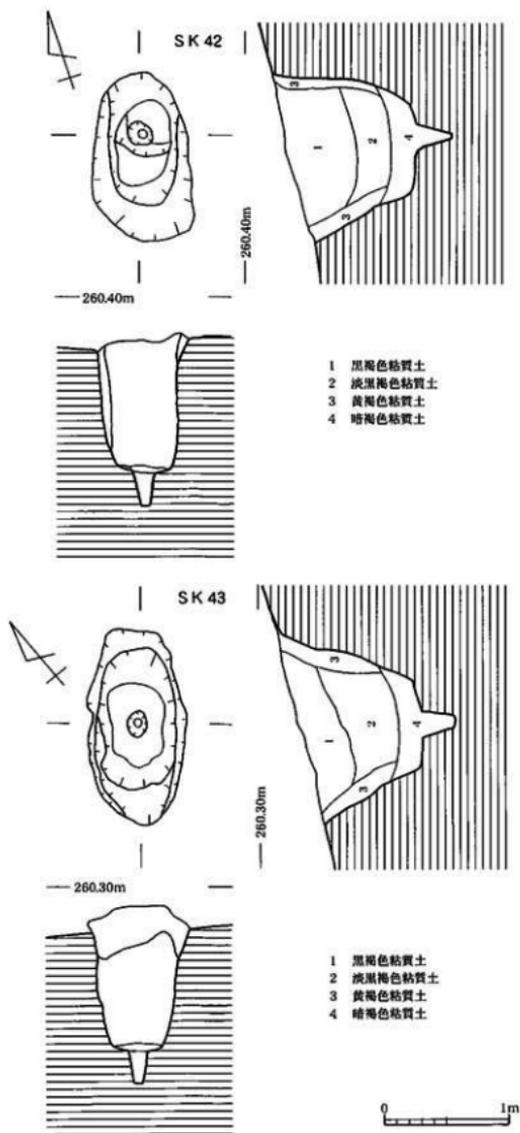
調査区の南西側に位置し、丘陵の南西側斜面に立地する(標高258.8m)。平面形は楕円形で、長軸の方位はN 60° Eで等高線に直交する。規模は、上端1.76×1.05m、下端0.50×0.35m、



第24圖 SK 37·38·39實測圖 (1:40)



第25圖 SK 40·41 夾湖圖 (1 : 40)



第26圖 S K 42·43 夷洲圖 (1:40)

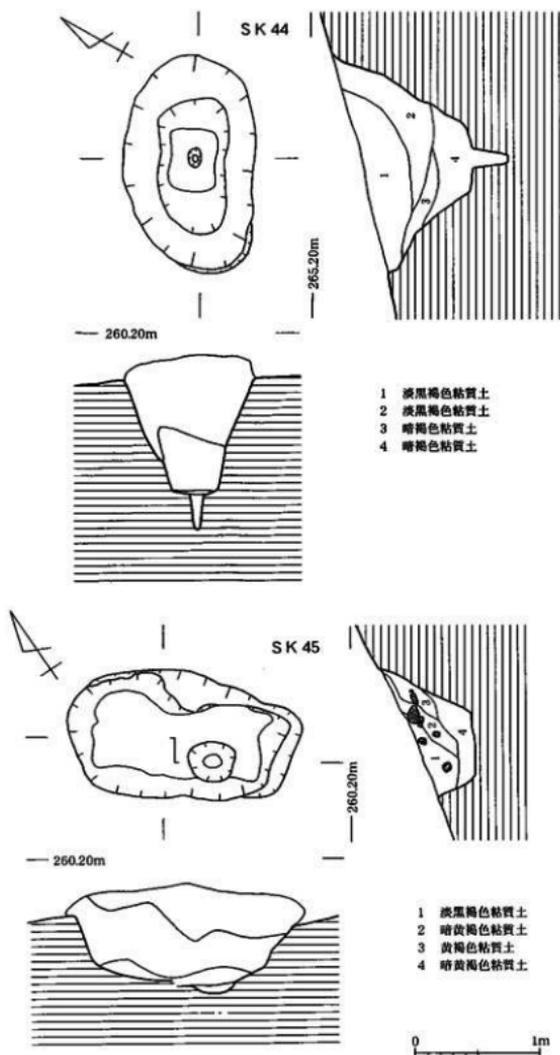
深さ1.10mである。掘り方は上端からゆるやかに傾斜し0.7m程度の深さでやや屈曲して急傾斜になり底面まで下る。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁際から中央部に向かってゆるやかに傾斜する。底面中央に上端16×10cm、深さ29cmのピット1を掘り込む。

S K 45 (第27図, 図版14)

調査区の南東際に位置し、丘陵の西側斜面に立地する(標高259.7m)。平面形は隅丸長方形で、長軸の方位はN40°Eで等高線に斜交する。規模は、上端1.80×1.00m、下端1.30×0.60m、深さ0.80mである。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、南東際にに向けてゆるやかに傾斜する。底面の南東側に上端37×32cm、深さ7cmのピット1を掘り込む。



石谷2号遺跡B地点空中写真(南西から)



第27圖 SK 44·45 尖洲圖 (1:40)

その他の遺構

S X 1 (第28図, 図版15)

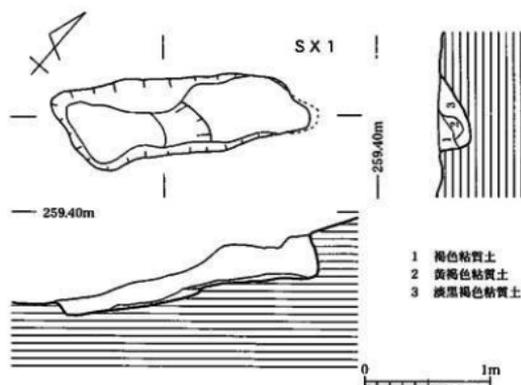
調査区の南西部に位置し、丘陵の西側斜面に立地する(標高258.9m)。平面形は北東—南西方向に細長い不整形の掘り込みで、規模は、上端が 2.0×0.6 m程度で、深さは0.3~0.1m程度で、底面は北東から南東に向かってゆるやかに傾斜し、北東部が段状をなす。

S X 2 (第29図, 図版15)

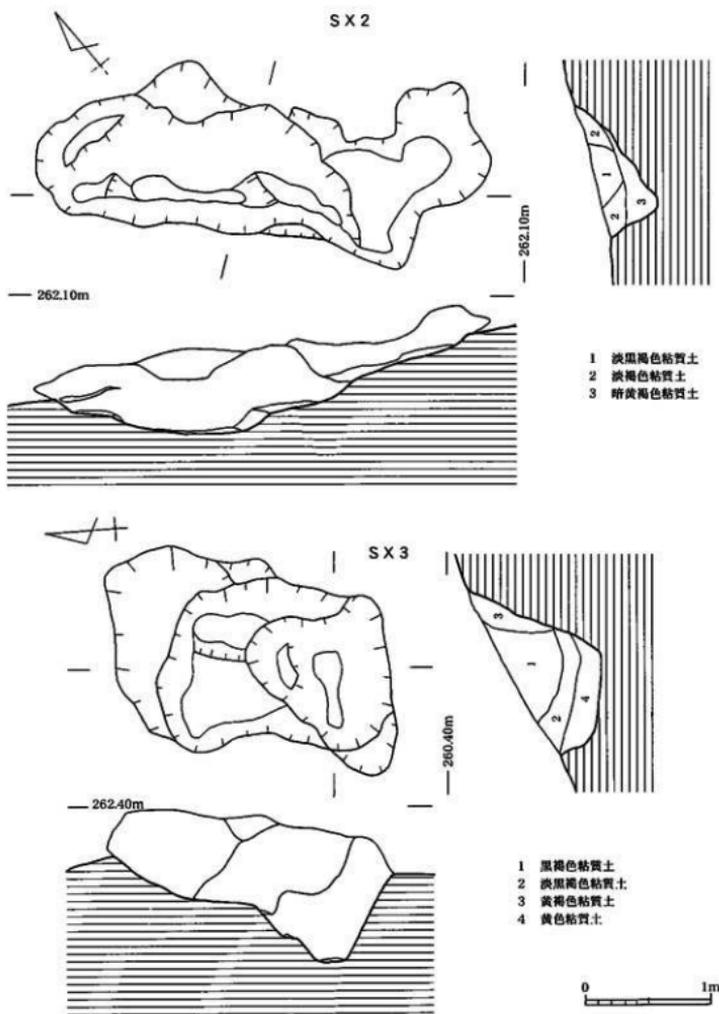
調査区の北西部に位置し、丘陵の西側斜面に立地する(標高261.6m)。平面形は不整形で、規模は、上端が 3.6×1.3 m程度、深さは70cm程度である。底面は壁際から中央部に向けてゆるやかに傾斜している。遺構の北西側と南東側の部分に不整形の段をつくる。

S X 3 (第29図, 図版15)

調査区の北西部に位置し、丘陵の西側斜面に立地する(標高260.0m)。平面形は不整形で、規模は、上端が 2.7×1.2 m程度、深さは1.2m程度で、底面は北東部から南西部に向けてゆるやかに傾斜している。遺構の北側部分は三段程度の不整形の段状をなす。



第28図 S X 1 実測図 (1:40)



第29图 SX 2·SX 3实测图(1:40)

3 まとめ

石谷2号遺跡は、口和町南部を流れる西城川を南に望む低丘陵の先端部の尾根線上に立地する(標高256～266m)。南側の水田面と本遺跡との標高差は60～70mである。検出した遺構の内訳は、A地点で土坑4基(SK1～SK4)、B地点で41基(SK5～SK45)とその他の遺構3基(SX1～SX3)である。検出した遺構のうち、土坑については性格不明の3基(SK28・SK29・SK45)をのぞく42基が規模・構造や立地からみて陥穴(落し穴)と考えられる。両調査区ともに遺物は出土していないが、本遺跡の約230m北側に位置する石谷3号遺跡付近から黒曜石製の石鏃1点が出土しており、当丘陵上での狩猟活動の存在をうかがわせ今回検出した陥穴群との関連性を示唆する。陥穴は、その性格上日常生活の場から隔てられた丘陵上などに営まれることが多く、遺物を伴うものは稀である。所属時期は、少量の遺物や時期の判明する遺構との切り合い関係などから縄文時代とされるものが多く、近年では北海道から九州までのいずれの地域でも豊富に検出され、縄文時代が陥穴群の盛行期とみられるようになっている⁽¹⁾。中国地方の陥穴は、鳥取県西部と岡山県北部にまたがる大山の周辺地域、岡山県の津山盆地、広島県の三次盆地に集中しており⁽²⁾、県内での調査例は広島県北部山間地域を中心に、現在27遺跡90例程度を数えるに至っている⁽³⁾。このうち、三次市・油免遺跡では2基の陥穴からそれぞれ中期中葉、後期中葉の縄文土器が出土している⁽⁴⁾。本遺跡の陥穴群の場合も、伴う遺物がないものの規模・形態や立地等の点で縄文時代とされる他の陥穴例との共通要素が多いことから縄文時代に属する可能性が高い。以下、これらの陥穴群について若干の検討を加え、まとめたい。

本遺構の土坑は、丘陵尾根の頂部付近及び南～西側斜面にかけて群在している。このうち、陥穴とみられる土坑の分布は、以下のように4群に分類できる。

第1群 丘陵北側尾根頂部(SK1～4)

第2群 丘陵南側尾根頂部及び周辺(SK5・13～27・SK30)

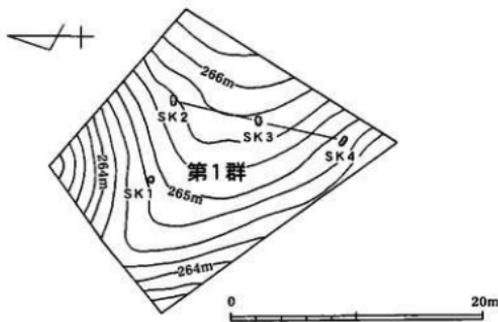
第3群 丘陵南側斜面(SK31～44)

第4群 丘陵南側西斜面(SK6～12)

各群に属する陥穴の規模・形態等の特徴は次のとおりである。

第1群 丘陵北側尾根頂部(SK1～4)

土坑の規模・形態からSK1とSK2～4に分類できる。いずれも土坑底面中央部にピット1を設ける。小ピットは概ね径10～14cm、深さ20～26cmである。SK1は平面形が円形で、土坑上端の規模は0.90×0.74m、深さ1.02mと小さい。SK2～4は平面形が隅丸長方形・長方形で、土坑上端の規模が1.16～1.20m×0.64～0.72m、深さ0.70～0.87mと中規模である。3基は長軸を概ね東西方向に揃えて13m程度の間隔で南北方向に一列状に並ぶ。以上のように、SK2～4は規模・形態及び配列からみて関連性の強い陥穴群と考えられる。



第30図 A地点陥穴配列図(1:400)

第2群 丘陵南側尾根頂部付近(SK5・13~27・SK30)

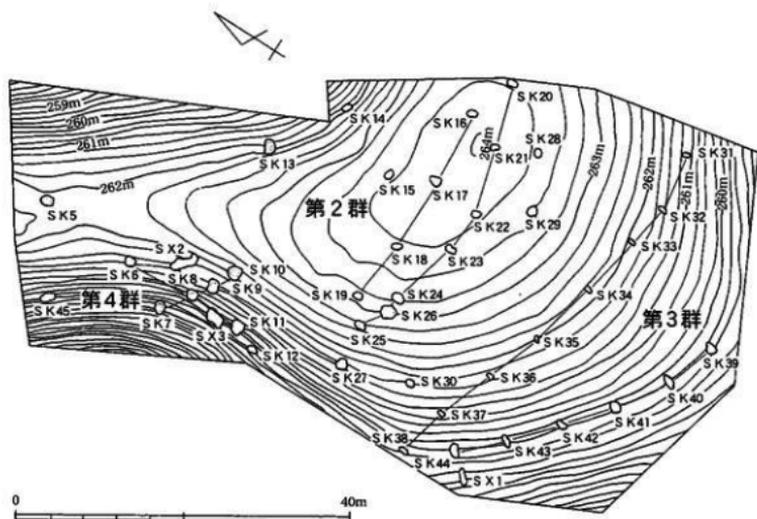
土坑の平面形は楕円形・隅丸方形・隅丸長方形で、いずれも土坑底面中央部に小ピットを設ける。小ピットは概ね径10~20cmで、深さ15~28cmである。第2群は、土坑上端の規模が1.52~1.88m×1.20~1.47m、深さ1.24~1.64mと比較的大きいもの(SK5・13-26-27)と、1.06~1.42m×0.60~0.94m、深さ約0.76~1.20mと比較的小さいもの(SK14~25)に分類できる。後者は土坑の長軸を概ね南北方向に揃えており、SK16~19が5~8m程度の、SK20~25が4~7m程度の間隔で一列状に並ぶ。以上のように、SK16~19及びSK20~25は規模・形態及び配列からみてそれぞれ関連性の強い陥穴群と考えられる。

第3群 丘陵南側斜面(SK31~44)

土坑の平面形は楕円形・隅丸長方形・長方形で、いずれも土坑底面中央部に小ピットを設ける。小ピットは概ね径10~20cm、深さ16~29cmであるが、SK30の小ピットは径30×23cmとやや大きくピット中に小礫を含むことから、この小礫を詰めて杭を固定したものと考えられる。第3群は、土坑上端の規模が1.37~1.87m×0.78~1.25m、深さ1.10~1.38mと比較的大きいもの(SK39~44)と、0.86~1.20m×0.45~0.90m、深さ0.73~1.00mと比較的小さいもの(SK30~38)に分類できる。前者は標高259.7~260.0mの範囲に立地する。土坑の長軸を南北方向に揃えて斜面に直交させ、東西方向に5~6m程度の間隔で約32mにわたって一列状に並ぶ。後者は標高259.5~262.3mの範囲に立地する。そのうちSK31~38も土坑の長軸を南北方向に揃えて斜面に直交させ、東西方向に5.5~7.8m程度の間隔で約47mにわたって一列状に並ぶ。以上のように、前者のSK39~44、後者のSK31~38は、立地や規模・配列からみてそれぞれ関連性の強い陥穴群と考えられる。

第4群 丘陵南側西斜面(SK6~12)

第4群は規模・構造等の面で他群との違いが際立つ。土坑の平面形は円形・楕円形であるが、SK12を除き土坑底面に何の施設も設けない。とくに、SK7~11は深さ2.24~2.62mと深く、掘り方は土坑上端から55°~70°で傾斜し、1m前後の深さで屈曲して以下底面まではほぼ垂直に近い傾斜で下る。そのため、土坑上端の規模が1.54~1.80m×1.24~1.58mと広いのに対し、底面の規模は0.40~0.70m×0.30~0.56mとかなり狭まり、断面形は漏斗状を呈する。第4群は丘陵の西側斜面に密集し、とくにSK7~10は約1~2m間隔で、あるいはSK6・8・11は約5~7m間隔で斜面上を一系列に斜行し、関連性の強い陥穴群と考えられる。



第31図 B地点陥穴配列図(1:600)

以上の結果にもとづき本遺跡の陥穴群の特徴を整理すると、次のとおりである。

- ① 平面形は楕円形が21基、隅丸長方形が12基で、両者を合わせて全体の8割以上を占める。
- ② 規模は1.3m以下×1.0m以下、深さ1.1m以下の中・小土坑が26基で、全体の6割以上を占める。
- ③ 底面に小ピットをもつ土坑が35基で、全体の8割以上を占める。小ピットはほとんどが径20cm以下、深さ30cm以下と小規模である。
- ④ 底面に施設をもたない土坑は規模が大きい。とくに深さは2.2m以上に及び、断面形は漏斗

状を呈する。

- ⑤ 第3群に典型的にみられるように、土坑の規模・形態が均質で、数m間隔をおいて一列状に並ぶ強い規格性のうかがわれる陥穴群が多い。

以上の特徴について、県内を中心とした他の陥穴例と比較してみたい。

陥穴の平面形については、県内例では長方形ないし隅丸長方形のものが7割以上を占め、円形・楕円形の形態例が比較的多いとされる中国地方の陥穴例⁶⁵⁾の中では特徴的である。本遺跡の陥穴群の場合、隅丸長方形のものも少なくないが、楕円形のもの多数を占める点で中国地方の陥穴例との共通性が認められる。次に陥穴の構造については、広島県北部山間地域の三次市・松ヶ迫A地点遺跡⁶⁶⁾、同・緑岩遺跡⁶⁶⁾南調査区及び北調査区の陥穴群を対象とした加藤光臣氏による類型がある⁶⁵⁾。それによると、土坑底面にピットをともなうⅠ類とそうした施設の全くないⅡ類に大別し、さらに土坑底面中央に径20×30cm、深さ30～40cm前後のピットⅠをもつⅠa類、径40×50cm、深さ15cm前後と比較的大きくて浅いピットⅠをもつⅠb類、径10cm、深さ15cm前後の複数の小ピットをもつⅠc類に細別し、計4タイプに類型化される。本遺跡の陥穴群の場合、Ⅰa類が全体の8割以上を占め、それ以外はⅡ類でありⅠb類・Ⅰc類は見出せない。ただし、Ⅰa類でもほとんどのピットが径10～20cm、深さ15～29cmと小規模である。

土坑底面のピットについては、刺殺用の槍状の杭を埋めた穴という説と対象獣の動きを封じる逆茂木を埋めたという説とが有力である⁶¹⁾。本遺跡例の場合明証がないが、土坑壁面に縦方向の溝を掘り込むSK1については、坑内に何らかの構造物を設けていた可能性がある⁶²⁾。一方、土坑底面に施設を設けない第4群の陥穴については、土坑の間口が大きく、断面形が途中から漏斗状に狭まってかなりの深さに達することから、坑内で獲物の動きを封じる機能をもつと考えられる。これは生きたままでの捕獲効率を高めるための工夫の跡とみられる⁶¹⁾。

最後に本遺跡の陥穴にみられる最も顕著な特徴としてあげられるのは、規模・形態が均質で、一定間隔で一列状に整然と並んでおり、陥穴群としての強い規格性がうかがわれることである。第3群のSK31～38、SK39～44はその典型で、第1群のSK2～4、第2群のSK16～19、SK20～25、第4群のSK7～10なども同様の可能性がある。こうした整然とした列配置は松ヶ迫A地点遺跡・緑岩遺跡の陥穴群にもみられるが、中国地方ではかなり特異なあり方とされ⁶²⁾、狩猟方法とも密接に関係する問題であろう。縄文時代の狩猟対象は、土坑の規模や遺跡出土の化石骨などからイノシシやシカなどの中・小動物が想定されており⁶⁷⁾、本遺跡の陥穴群も、こうした動物が西城川縁の水場と丘陵上を行き来する「けもの道」上に仕掛けられていたとみるのが妥当であろう⁶⁸⁾。陥穴については、「ある一定の狩猟法を持つ狩猟集団の組織的展開による狩猟社会の様相を明らかにする、すぐれて社会構造論的なアプローチが可能な資料⁶⁹⁾」として、縄文時代の生業システムや集団組成の構造などを追及する視点が提示されている⁶⁵⁾。そうした視点からも、配置上顕著な特徴をみせる陥穴が数多く検出された本遺跡は貴重な資料を提供したといえよう。

参考文献

- (1) 佐藤宏之「縄文時代の陥し穴」『考古学ジャーナル』468号 ニューサイエンス社 2001年
- (2) 稲田孝司「西日本の縄文時代落とし穴」『論苑考古学』 天山舎 1993年
- (3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(20) 段遺跡』
2012年
これによれば、本遺跡の所在する広島県北部山間地域で陥穴を検出した遺跡として、三次市の松ヶ道A地点遺跡・緑岩遺跡・油免遺跡、庄原市の宮脇遺跡、山県郡北広島町の岡の段B地点遺跡などがある。
その他近年の発掘調査では、庄原市の半戸遺跡などで陥穴とみられる土坑を検出している。
- (4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(IV) 油免遺跡の調査』 2003年
- (5) 加藤光臣「中国山間地域の縄文時代の陥穴—広島県北部山間地域の事例を中心として—」『研究紀要 汗と夢』
第3号 広島県立廿日市西高等学校 1994年
- (6) 広島県教育委員会『緑岩古墳—三次地区工業団地第2期造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査—』1983年
- (7) 金子浩昌「狩猟対象と技術」『縄文文化の研究』第2巻 雄山閣 1983年
白石浩之「旧石器から縄文時代の狩猟」『考古学ジャーナル』468号 ニューサイエンス社 2001年 など
- (8) 陥穴は、松ヶ道A地点遺跡や緑岩遺跡では、馬洗川を眼下に望む丘陵尾根上に立地している。また油免遺跡では、上下川に面した河岸段丘の緩斜面上の「けもの道」に沿って仕掛けられたと考えられている。
- (9) 佐藤宏之「陥し穴と縄文時代の狩猟社会」『考古学と民族誌 渡辺仁教授古稀記念論文集』 六興出版
1989年



S K 32 (南から)

第2表 石谷2号遺跡土坑計測表

遺構	平面形	現存規模 (m)				底面ビット			長軸と等高線との関係 ※
		上端			深さ	有無	上端径 (cm)	深さ (cm)	
		長軸	短軸	長短比					
1 SK 1	円形	0.90	0.74	1.22	1.02	○	10	20	—
2 SK 2	隅丸長方形	1.18	0.72	1.64	0.87	○	14	24	平行
3 SK 3	隅丸長方形	1.16	0.70	1.66	0.87	○	14 × 11	26	斜交
4 SK 4	長方形	1.20	0.64	1.88	0.70	○	13 × 11	20	平行
5 SK 5	楕円形	1.52	1.20	1.27	1.27	○	12	15	平行
6 SK 6	円形	1.20	1.00	1.20	1.02	×	—	—	—
7 SK 7	楕円形	1.54	1.24	1.24	2.24	×	—	—	直交
8 SK 8	円形	1.56	1.46	1.07	2.33	×	—	—	—
9 SK 9	楕円形	1.80	1.30	1.38	2.62	×	—	—	直交
10 SK 10	円形	1.70	1.50	1.13	2.46	×	—	—	—
11 SK 11	円形	1.80	1.58	1.14	2.50	×	—	—	直交
12 SK 12	楕円形	1.12	0.77	1.45	1.10	○	16 × 12	22	斜交
13 SK 13	隅丸長方形	1.88	1.24	1.52	1.64	×	—	—	直交
14 SK 14	楕円形	1.30	0.80	1.63	1.10	○	14 × 11	27	斜交
15 SK 15	楕円形	1.20	0.90	1.33	1.07	○	12 × 10	16	平行
16 SK 16	隅丸長方形	1.06	0.72	1.47	0.76	○	20 × 16	24	—
17 SK 17	隅丸長方形	1.42	1.00	1.42	1.20	○	20 × 18	28	—
18 SK 18	楕円形	1.30	0.80	1.63	1.02	○	10	20	平行
19 SK 19	隅丸方形	1.12	0.94	1.19	1.06	○	12	15	平行
20 SK 20	隅丸方形	1.25	0.84	1.49	1.00	○	16	20	平行
21 SK 21	楕円形	1.10	0.60	1.83	0.86	○	16	23	—
22 SK 22	楕円形	1.20	0.80	1.50	0.84	○	14	26	—
23 SK 23	隅丸長方形	1.14	0.58	1.97	0.90	○	16 × 12	22	直交
24 SK 24	楕円形	1.30	0.80	1.63	1.03	○	25 × 17	25	平行
25 SK 25	楕円形	1.18	0.74	1.59	1.00	○	18 × 16	21	平行
26 SK 26	楕円形	1.60	1.25	1.28	1.28	○	18 × 15	26	平行
27 SK 27	円形	1.60	1.47	1.09	1.24	○	17 × 15	28	—
28 SK 28	円形	1.08	0.94	1.15	0.28	×	—	—	—
29 SK 29	円形	1.30	1.20	1.08	0.30	×	—	—	—
30 SK 30	楕円形	1.06	0.90	1.18	0.80	○	30 × 23	27	平行
31 SK 31	隅丸長方形	0.90	0.56	1.61	0.94	○	15	23	直交
32 SK 32	楕円形	1.20	0.73	1.64	1.00	○	19	25	直交
33 SK 33	隅丸長方形	0.97	0.45	2.16	0.94	○	18 × 15	27	直交
34 SK 34	隅丸長方形	0.98	0.58	1.69	0.88	○	15 × 13	26	直交
35 SK 35	隅丸長方形	1.00	0.60	1.67	0.95	○	14 × 12	23	直交
36 SK 36	長方形	0.88	0.52	1.69	0.73	○	16 × 12	24	直交
37 SK 37	隅丸長方形	0.86	0.50	1.72	0.95	○	15	18	斜交
38 SK 38	隅丸長方形	1.10	0.53	2.08	0.92	○	14 × 12	16	平行
39 SK 39	楕円形	1.50	1.14	1.32	1.25	○	16 × 13	22	直交
40 SK 40	楕円形	1.87	0.93	2.01	1.38	○	17	28	直交
41 SK 41	楕円形	1.58	1.25	1.26	1.20	○	17	21	直交
42 SK 42	楕円形	1.37	0.78	1.76	1.10	○	20 × 18	29	直交
43 SK 43	楕円形	1.54	0.78	1.97	1.16	○	21 × 15	27	直交
44 SK 44	楕円形	1.76	1.05	1.68	1.10	○	16 × 10	29	直交
45 SK 45	隅丸長方形	1.86	1.00	1.86	0.80	×	37 × 32	7	斜交

※平面形が円形で長軸と短軸の比が概ね1.20以下のもの及び屋根頂部平ら面に立地するものを除く。

IV 石谷3号遺跡

1 調査の概要

(1) 立地と調査前の状況

石谷3号遺跡は、庄原市口和町金田字塩谷に所在する。

本遺跡は北から南へ延びる低丘陵上に立地する（標高252～260m）。低丘陵には東から侵食谷が貫入しており、本遺跡はその侵食谷に面した南斜面に立地する。低丘陵に沿って西城川が「U」字状に蛇行しながら西流しており、低丘陵の麓には西城川との間に水田が広がっている。この水田と本遺跡との標高差は約58～66mである。本遺跡から130～230m南側の丘陵尾根線上には石谷2号遺跡が立地する。

(2) 調査の概要

石谷3号遺跡は、平成21年度に石谷2号遺跡のA地点と並行して発掘調査を行った。

調査区は侵食谷に面した南斜面に南北に細長く広がり、調査面積は1,600㎡である。調査区内の基本的な土層は、①表土、②黒褐色粘質土、③暗褐色粘質土、④暗黄褐色粘質土、⑤黄褐色粘質土であり、遺構は④暗黄褐色粘質土の上面で検出した。

検出した遺構は、調査区中央部を中心に竪穴住居跡2軒（SB1・SB2）、土坑2基（SK1・SK2）、その他の遺構3基（SX1・SX2）、ピット6個である。このうちSB1は、斜面下方の南側が一部流失しているが方形竪穴住居である。主柱穴は2個で、住居東壁に造付けのカマドを設ける。住居内から土師器や須恵器の破片が出土しており、床面中央に台石が据えられている。焼失家屋とみられ、炭化材や焼土も出土した。また、SB2は、調査区西端で「L」字状の溝1条と柱穴1個を検出したもので、全容は明らかではないが方形竪穴住居と考えられる。溝の下層から土師器片が出土した。なお、調査区から東へ約10mの地点でも竪穴住居跡が確認されており、SB1・SB2とともに小規模な集落を構成していた可能性がある。

なお、調査区外ではあるが付近から黒曜石の石鏃1点（第40図、図版22）を採集した。時期不明であるが、石谷2号遺跡で多数の陥穴が検出されたことを考えあわせると、付近の低丘陵上で、広範囲にわたる動物の捕獲が行われていたことを示唆するものであろう。

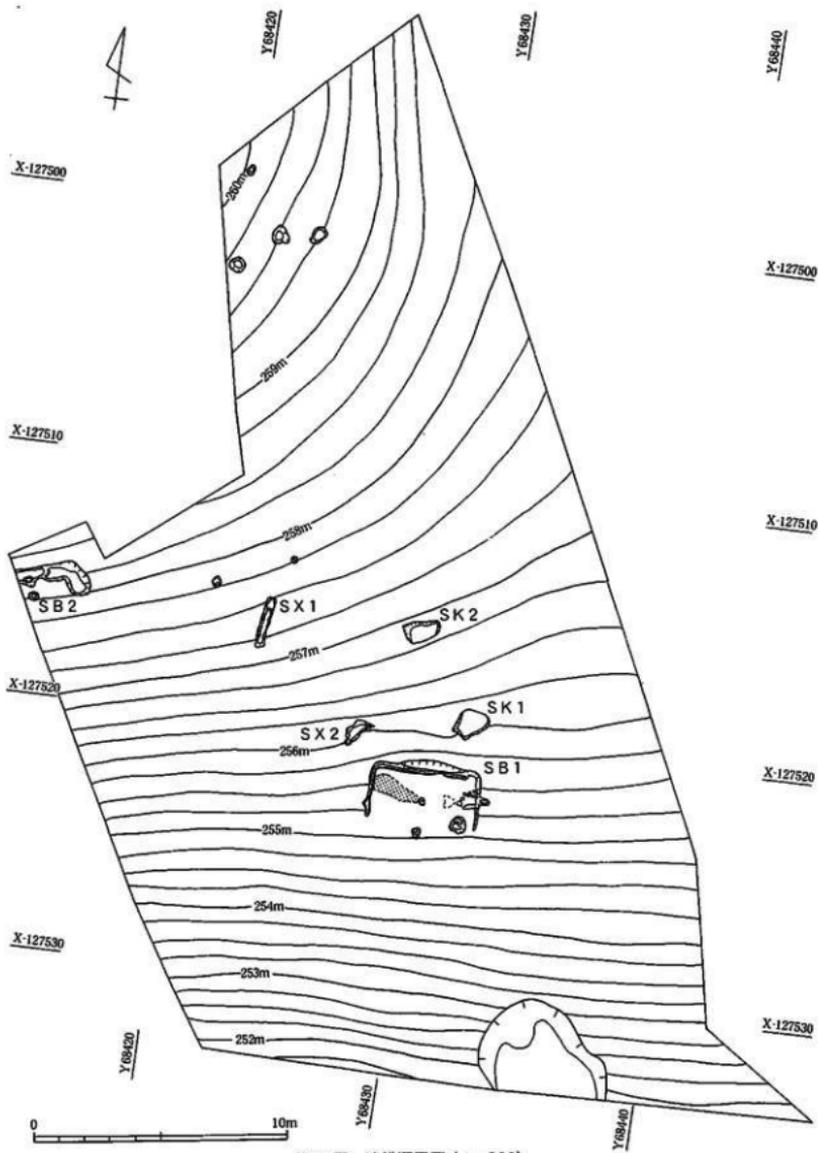
2 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

SB1（第33図、図版17・18）

立地 調査区中央部やや南寄りに位置し、北から南へ下る斜面上に立地する（標高255.5m）。住居の北辺はほぼ東西方向を指し等高線に平行する。

規模 床面の南側を流失するが、北辺長4.4m、東辺長2.2m（現存規模）、西辺長2.1m（現存規模）である。平面形は方形で、現存の床面積は約9.8㎡である。壁高は、最も残りのよい北壁中



第32圖 遺構配置圖 (1:200)

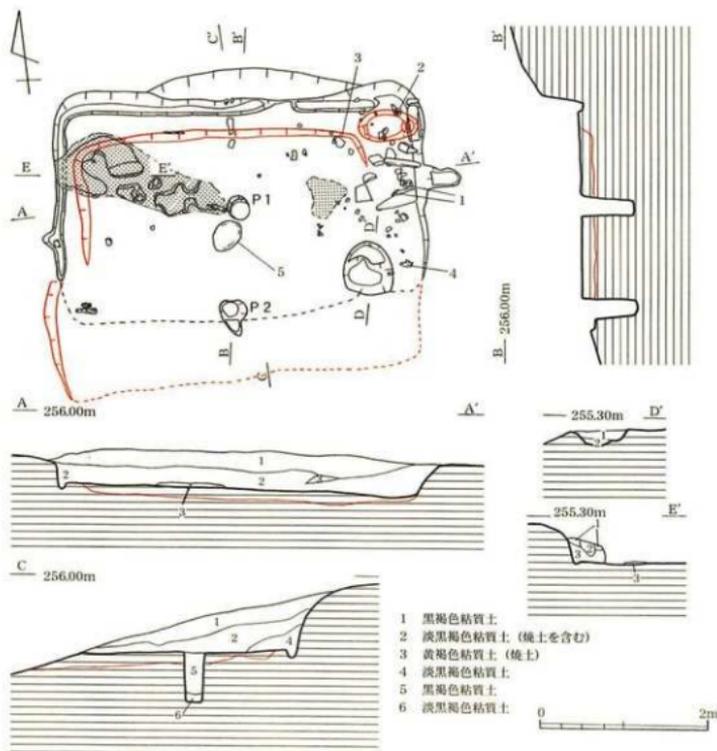
央部で約0.68mである。

壁溝 西辺から北辺にかけての壁際に下端幅5～10、深さ3～8cmの壁溝がめぐる。壁溝は北辺中央部でいったん途切れ再び東へ延びるが、東壁から25cmほど手前で終わっている。

床面 北西側から北東側に向かってゆるやかに傾斜する。なお、壁際から20cm内側の床面中央部はいったん掘り下げた後に、黄褐色粘質土で10～15cmの厚さで貼床をしている。

支柱穴 支柱穴と思われるピットは2個(P1・P2)で、支柱を南北方向に配した2本柱構造の住居である。P1-P2を結ぶ軸線は北東-南西方向を指し(N12°E)、等高線に直交する。P1-P2間の距離は1.20mである。各支柱穴の規模は、P1が長径30cm×短径23cm、深さ66cm、P2は上端が南側に広がっているが概ね長径30cm×短径25cm、深さ67cmである。

炉跡 検出されていない。



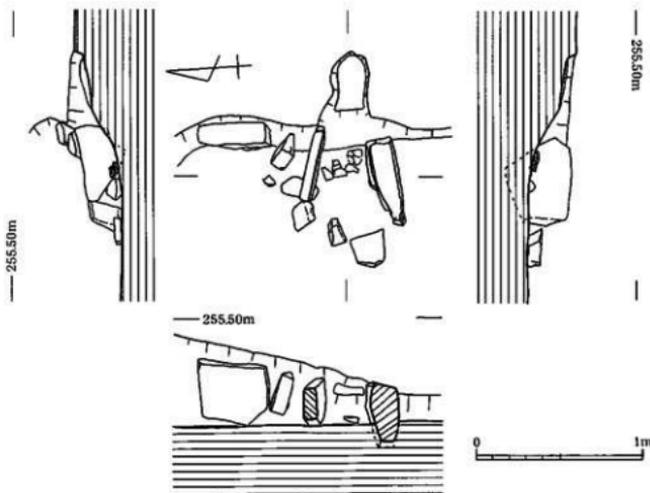
第33図 SB1実測図(1:60)

アミ目は焼土

カマド跡 住居跡の北東隅から70cm程度南(中央)寄りの東壁で造付けのカマドを検出した。燃焼部の左右(南北)には袖部に用いた扁平な石材が残存し、奥壁から手前側へ開き気味に立つ。左(北)側の袖部に、壁際から長さ45cm、幅7cm、高さ30cmの石材を、右(南)側の袖部にも、長さ53cm、幅17cm、高さ39cmの石材を立てる。焚口部に焼けた痕跡はみられない。煙道は天井部を失っているが、住居壁面を現存で幅20cm、奥行き35cmの馬蹄形に掘り凹めた構造である。煙道は焚口部から斜め上方に延びている。煙道底面の傾斜はやや急で(30°)、その後なだらかになり(10°)煙出口付近で立ち上がる(60°)。なお、カマド正面から左袖部周辺にかけて、扁平な石材が散乱しておりカマドの部材とみられる。とくに、住居北東隅の東壁に沿って長さ42cm、幅13cm、高さ38cmの大型で扁平な石材が据えられていた。隣接する北壁東端部はやや奥(北)側に広がり、カマドの痕跡の可能性もあることから、この部分に上記の石材を部材に用いた古いカマドが存在していた可能性がある。また、住居北東隅の床面下に径70×35cm、深さ12cm程度の掘り込みがあり、これも古いカマドに関わる可能性が考えられる。

その他 カマド跡正面付近の床面が50×45cmの範囲にわたって熱を受けている。また、住居跡北西側の床面も200×60cmの範囲にわたって熱を受けており、床面から覆土下層にかけて焼土塊もみられる。床面や覆土下層からは炭化材も出土しているが、炭化材は少量でまとまりがないことから家屋の構造材が焼け落ちたものではない。

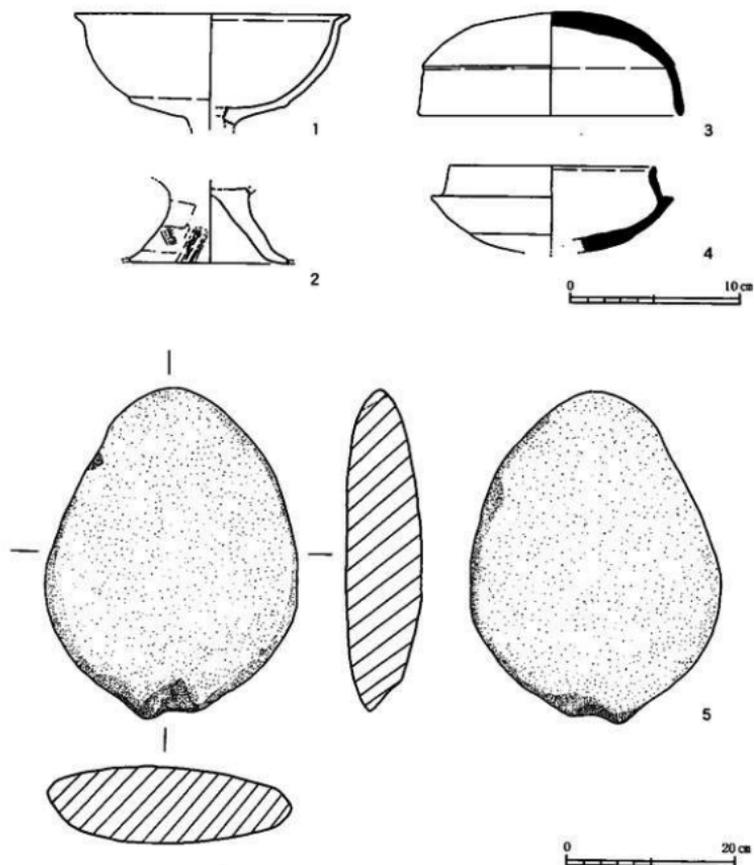
なお、カマドに近接する南側の床面に、径60cm、深さ27cmで北側に段を設けた円形の掘り込みがあるが、住居に伴う施設かどうか不明である。



第34図 SB1カマド跡実測図(1:30)

遺物の出土状況 土師器（高杯脚部）や須恵器（杯蓋・杯身）の破片，台石1点などが出土した。土器は概ねカマド燃焼部や周辺の住居東側に分布し，台石は床面中央で出土した。住居北東隅の床面下で検出した浅い掘り込みからも土師器片が出土したが，他の土師器片と同時期と思われる。出土遺物（第35図，図版22）

1は土師器・高杯の杯部片である。杯底部はやや外上方に延びて体部との境は段をなす。体部は内湾しながら外上方に立ち上がり，口縁部は外反して端部を丸くおさめる。調整は不明瞭だが，内面は口縁部から体部上半にかけて横方向のナデを，体部下半～底部にかけてはナデを施す。外



第35図 SB1出土遺物実測図（1：3，1：6）

面は口縁部から体部下半にかけては横方向のナデを、底部にもナデを施す。色調は、内外面ともに橙褐色を呈する。2は土師器・高杯の脚部で、一部に杯部底面が残る。低脚でやや太めの脚基部からラッパ状に外下方に広がり、端部付近で水平方向に変わる。脚端部を失う。調整は、脚部の内面は横方向のナデを施し、杯部底面にも丁寧なナデが認められる。外面は縦方向のハケ目を施した後に横方向のナデを施す。色調は、内面が灰白色で脚底部が一部灰色を呈する。外面は灰白色～淡黄褐色を呈する。3は須恵器・杯蓋である。丸みを帯びた天井部からゆるやかに外下方に延び、体部との境は明瞭な段をなす。体部はやや外下方に開き気味に下る。口縁端部はやや尖り気味におさめる。調整は、天井部外面が回転ヘラ削りを、その他は内外面とも回転ナデを施す。色調は内外面とも灰白色を呈する。4は須恵器・杯身である。底部から内湾しながら外上方に延びる。たちあがり部は内傾して長く延び、端部は尖り気味におさめる。受部はごく短く外上方に延びて、端部を丸くおさめる。調整は、底部外面が回転ヘラ削りを、その他は内外面とも回転ナデを施す。色調は内外面とも青灰色を呈する。5は台石である。扁平な楕円形で、一方の先端が若干窪む。最大長40cm、最大幅30cm、最大厚9.1cm、重量14.38kgである。部分的にかすかな赤味を帯び、焦げつきのような黒斑もごく一部に認められることから、熱を受けた可能性がある。

S B 2 (第36図, 図版19)

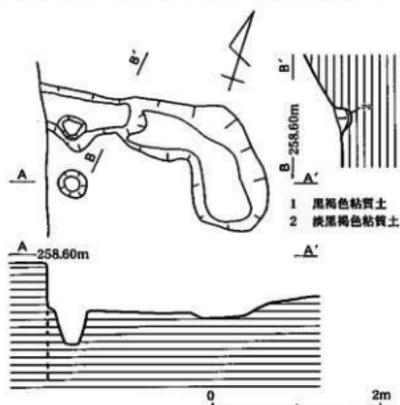
立地 調査区中央西端に位置し、北から南へ下る傾斜約30°の斜面上で「L」字状の溝とピットを検出した(標高258.0m)。遺構は調査区外に広がるため全容は明らかでないが、壁溝の痕跡や柱穴とみられるピットがあることから、本遺構は方形堅穴住居跡の一部と考えられる。

壁溝 北辺から東辺にかけて残存し、壁溝底面は東側が約10cm高く段状をなす。現存規模は北辺2.5m、東辺1.3m、下端幅30～50cmで、深さは北辺西半が12～14cm、東半から東辺が6～13cmである。北辺の壁溝底面に35×25cm、深さ8cmの窪みがあるが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。

床面 北から南にかけてゆるやかに傾斜する。

柱穴 北辺の壁溝から0.2mほど内側(南側)の床面に径0.35m、深さ0.22mのピットがあり、柱穴と考えられる。

出土遺物 覆土中から土師器とみられる細片2点が出土している。

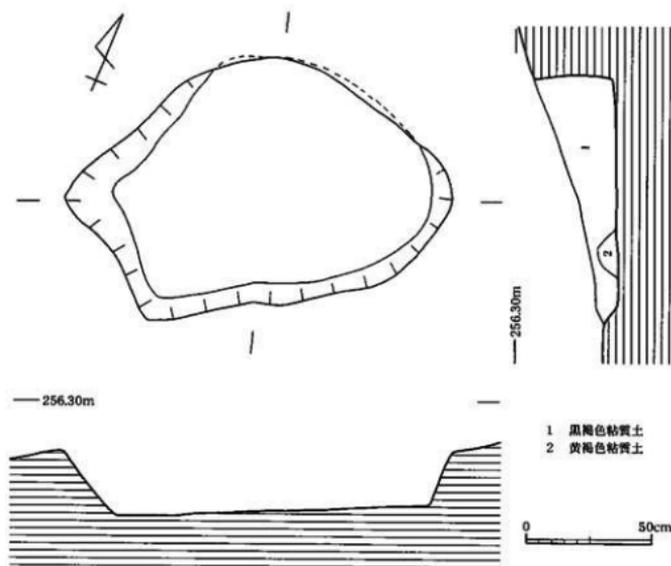


第36図 S B 2実測図(1:60)

(2) 土坑

SK 1 (第37図, 図版19・20)

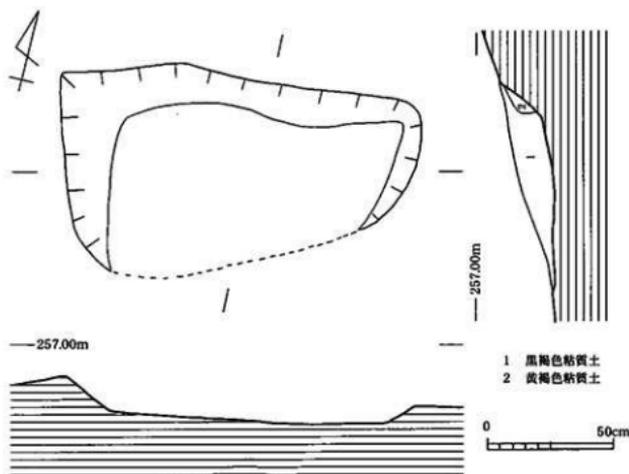
調査区中央部に位置し、北から南へ下る斜面上に立地する(標高256.1m)。平面形は不整な楕円形をなし、長軸の方位はN 68° Eで等高線にほぼ平行する。規模は、上端が1.53×1.00m、下端が1.25×0.90m、深さは0.32mである。底面はほぼ平坦で、北から南に向かってゆるやかに傾斜する。壁面は北側がややオーバーハング気味で、その他は比較的ゆるやかな斜面をなす。



第37図 SK 1実測図(1:20)

SK 2 (第38図, 図版20)

調査区中央部に位置し、北から南へ下る斜面上に立地する(標高256.8m)。平面形は不整な長方形をなし、長軸の方位はN 78° Eをさし、等高線にほぼ平行する。南辺を流失するが、規模は、上端が1.4×0.8m(現存)、下端が1.1×0.7m(現存)、深さは0.22mである。底面はほぼ平坦で、北から南に向かってゆるやかに傾斜する。



第38図 SK 2実測図 (1:20)

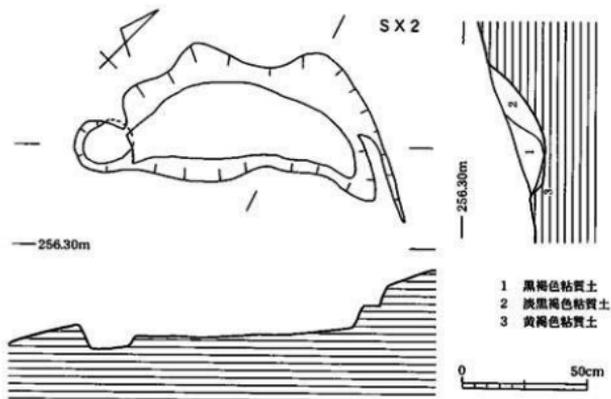
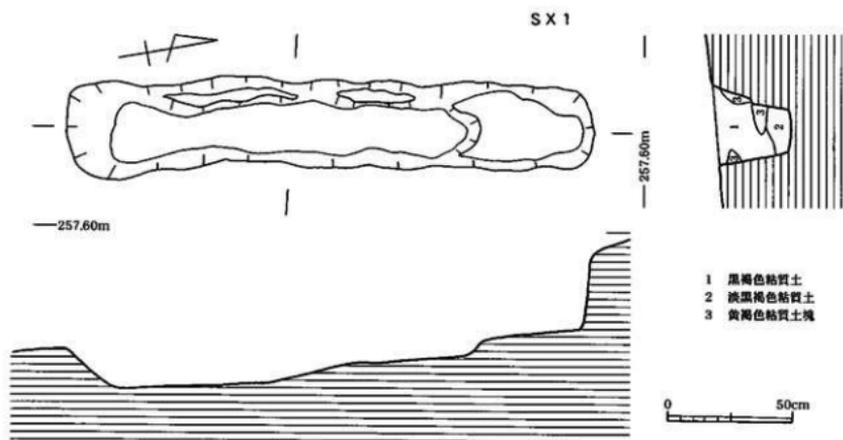
(3) その他の遺構

S X 1 (第39図, 図版21)

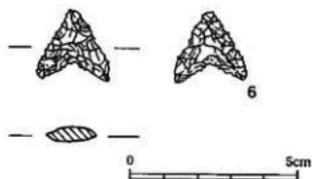
調査区の中央部やや西寄りに位置し、丘陵の西側斜面に立地する (標高257.3m)。平面形は南北方向に長い隅丸方形で、長軸の方位は $N 11^{\circ} E$ で等高線にほぼ直交する。底面は北側3分の1程度がやや高く段状をなす。規模は、上端が $3.60 \times 1.30m$ 、下端は北側上段部で $0.40m \times 0.25m$ 、深さ $0.27m$ 、下段部は $1.40 \times 0.20m$ 、深さ $0.32m$ である。底面は北側から南側に向けてゆるやかに傾斜する。

S X 2 (第39図, 図版21)

調査区の中央部に位置し、丘陵の西側斜面に立地する (標高256.1m)。平面形は北東—南西方向に長い半月形で、長軸の方位は $N 47^{\circ} E$ で等高線に斜交する。規模は上端が $1.25 \times 0.56m$ 、下端が $0.85 \times 0.3m$ 、深さ $0.21m$ である。底面はほぼ平坦で、北東側から南西側に向けてゆるやかに傾斜している。なお、本遺構の南西端は、上端径約 $0.25 \times 0.20m$ 、下端径約 $0.20m \times 0.15m$ 、深さ約 $0.1m$ の円形に掘り込まれており、本遺構とは別個のピットの可能性もある。



第39圖 SX 1・SX 2 実測圖 (1:20)



第40圖 調査区外採取遺物実測圖 (2:3)

3 まとめ

石谷3号遺跡は、口和町の南部を流れる西城川を南に望む低丘陵上にあり、この丘陵に東から貫入する侵食谷に面した南斜面に立地する（標高252m～260m）。南側の水田面との標高差は約60mである。今回の調査で検出した遺構の内訳は、竪穴住居2軒（SB1・SB2）、土坑2基（SK1・SK2）、その他の遺構2基、柱穴状のピット6個である。主な出土遺物は、土師器（高杯）、須恵器（杯蓋・杯身）、石器（台石）で、調査区外からは黒曜石の石鏃1点も採集されている。ここでは、規模・構造や時期が検討可能なSB1を中心に整理しておきたい。

SB1は調査区の中央やや南側の斜面上に立地する方形竪穴住居である。出土した須恵器の杯蓋・杯身は、陶邑編年のⅡ形式2～3段階、6世紀中頃のものと考えられる⁽¹⁾。また、SB1の13mほど北西にはSB2が存在する。SB2も方形竪穴住居とみられ、土師器の細片が出土したのみであるが、SB1と同時期の可能性が高い。さらに調査区外の約10m東側の斜面でも竪穴住居1軒を確認しており、これら3軒の住居は小規模な集落を形成していたものと考えられる⁽²⁾。

SB1は2本柱構造で、南側を流失するが床面積は14㎡程度と推定され（現存の床面積は9.8㎡）、中規模の住居である。住居の東壁には、両袖部分に石材を用いた造付けのカマドを設けているが、隣接する北壁にも先行する古いカマドが存在した可能性がある。土器は概ねカマドの焚口部やその周辺から出土しており、住居東側床面がカマドを中心として厨房的な空間だったことをうかがわせる。また、カマド正面付近及び住居跡北西部の床面が熱を受けており、床面や覆土下層に焼土や炭化材も出土していることから、SB1は火災に遭ったものと考えられるが、焼土範囲は部分的で、炭化材もわずかなことから火災は家屋全体に及ぶものではなかったと考えられる。

県北地域の6世紀の2本柱構造の方形住居の類例は多くはないが⁽³⁾、そのほとんどは床面積が概ね8㎡～14㎡と中・小規模の住居である。また2本の主柱を結ぶ軸線の方向が等高線に平行したものがほとんどで、SB1のように直交するものは三次市・松ヶ迫A地点遺跡⁽⁴⁾SB6、庄原市・小和田遺跡⁽⁵⁾第5号住居跡などに限られている。2本柱構造の住居には庄原市・大成遺跡3号住居跡、同・4号住居跡のように鉄器生産に関わる工房跡と考えられるやや特殊な例もみられるが⁽⁶⁾、多くの場合は、カマドを伴う通常の住居である。本遺跡のSB1についても一般的な住居とみるのが妥当であろう。

註

- (1) 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981年
- (2) 口和町内には、同様な立地の古墳時代の集落遺跡として、常定の峯双遺跡や常定川平1号遺跡、向泉の空山遺跡などがある。
- (3) 松ヶ迫A地点遺跡SB6、浅谷山東B地点遺跡SB7、小和田遺跡第1号住居跡・第5号住居跡、則清1号

遺跡SB3・同2号遺跡SB2、大歳遺跡SB4などがある。

- (4) 広島県教育委員会・(財) 広島県埋蔵文化財調査センター『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告—三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査—』1981年
- (5) 広島県教育委員会・(財) 広島県埋蔵文化財調査センター『西山・小和田・永宗 国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』1982年
- (6) 大成遺跡調査団『庄原市大成遺跡の発掘調査』1986年

第3表 石谷3号遺跡出土遺物観察表 ()内は現存値

遺物番号	種別・器種	計測値 (cm)	調整	色調	胎土	焼成	備考
1	土師器・高杯 杯部	復元口径：16.0 器高：(6.7)	内外面：ナデ	内外面：橙褐色	2～3mm 大の砂粒を若干含む	普通	脚部を欠く
2	土師器・高杯 脚部	脚部底径：(9.3) 器高：(5.2)	内面：ナデ 外面：ハケ目、ナデ	内面：灰白色 (一部灰色) 外面：灰白色～ 淡黄褐色	1mm以下の 細粒を若干含む	良好	
3	須恵器・杯蓋	復元口径：15.3 器高：6.2	内面：回転ナデ 外面：天井部一回転ヘラケズリ その他一回転ナデ	内外面：灰白色	2～3mm 大の砂粒を若干含む	良好	
4	須恵器・杯身	復元口径：12.0 復元受部径：14.1 器高：(5.1)	内面：回転ナデ 外面：天井部一回転ヘラケズリ その他一回転ナデ	内外面：青灰色	2mm大の 砂粒を若干含む	良好	
5	台石	最大長：40.0 最大幅：30.0 最大厚：9.1 重量：14.38kg	—	淡黄褐色 ～かすかに橙褐色	—	—	
6	石蔵	最大長：2.1 最大幅：2.1 最大厚：0.35 重量：0.98g	—	—	—	—	石材は黒曜石

図 版



空中写真（南東から）
石谷2号遺跡・石谷3号遺跡の立地する低丘陵



a 空中写真（北西から）
中央が石谷2号遺跡
(B地点)



b 空中写真（北西から）
手前が石谷3号遺跡
前方が石谷2号遺跡
(A地点)



a 空中写真 (北から)



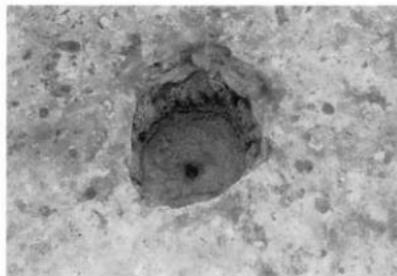
b 同左 (南西から)



c 調査前全景
(南東から)



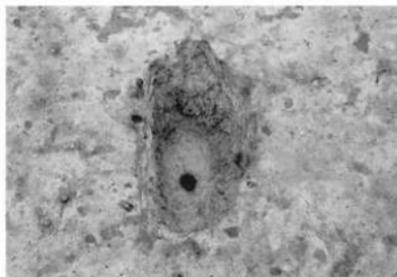
d 調査後全景
(北西から)



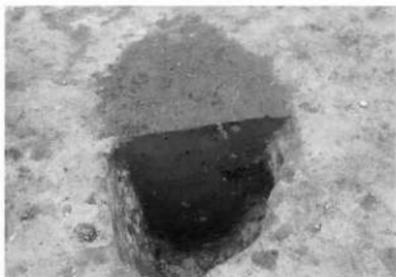
a SK1完掘（北西から）



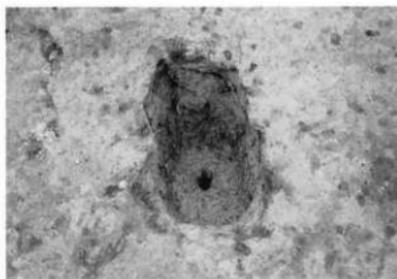
b SK1土層断面（南西から）



c SK2完掘（西から）



d SK2土層断面（西から）



e SK3完掘（北西から）



f SK3土層断面（西から）



g SK4完掘（北西から）



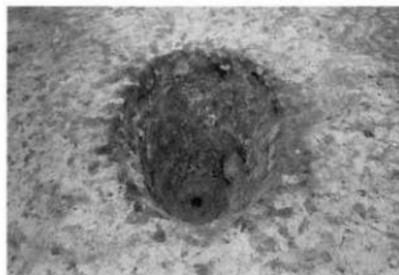
h SK4土層断面（北西から）



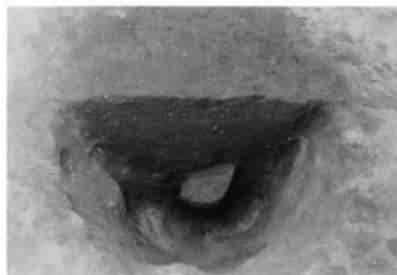
a 空中写真 (西から)



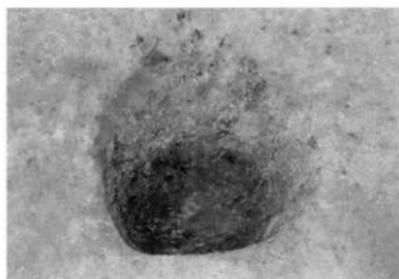
b 調査後全景
(北西から)



a SK 5完掘 (北西から)



b SK 5土層断面 (南から)



c SK 6完掘 (南西から)



d SK 6土層断面 (北西から)



e SK 7完掘 (南西から)



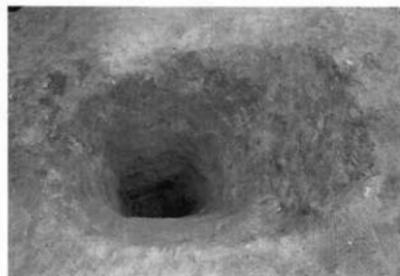
f SK 7土層断面 (南から)



g SK 8完掘 (南から)



h SK 8完掘 (南西から)



a SK9完掘 (南から)



b SK9土層断面 (南から)



c SK10完掘 (南から)



d SK10土層断面 (南から)



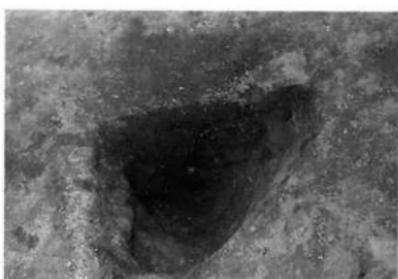
e SK11完掘 (南から)



f SK11土層断面 (南東から)



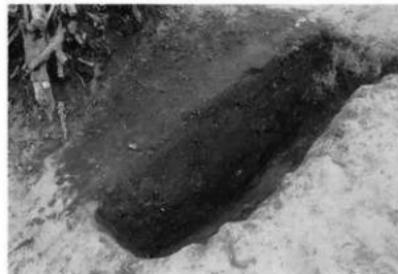
g SK12完掘 (南から)



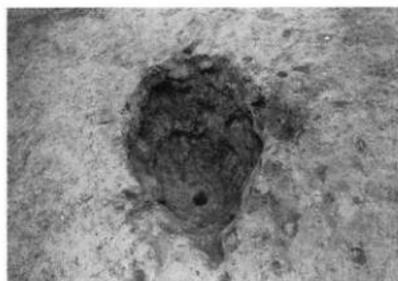
h SK12土層断面 (南から)



a SK 13 完掘 (北東から)



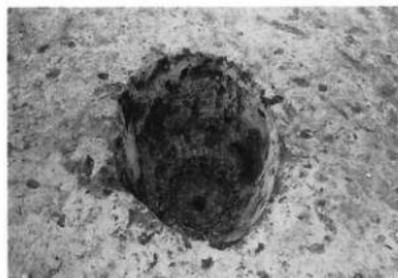
b SK 13 土層断面 (北から)



c SK 14 完掘 (北西から)



d SK 14 土層断面 (北西から)



e SK 15 完掘 (南東から)



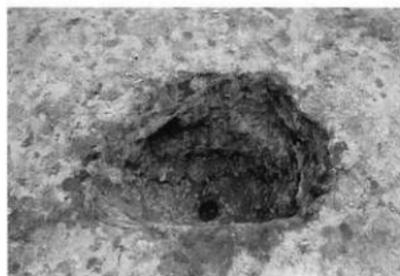
f SK 15 土層断面 (南東から)



g SK 16 完掘 (南から)



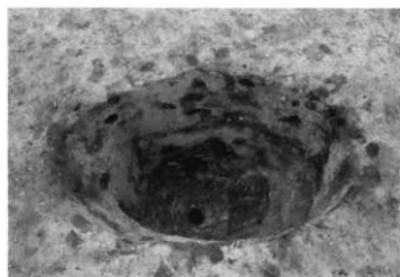
h SK 16 土層断面 (南から)



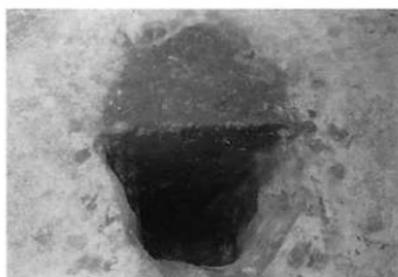
a SK 17 完掘 (西から)



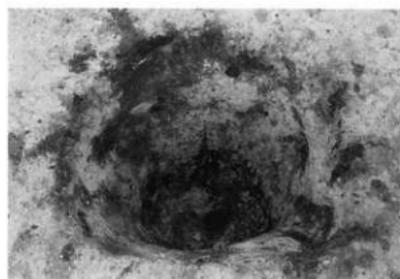
b SK 17 土層断面 (南から)



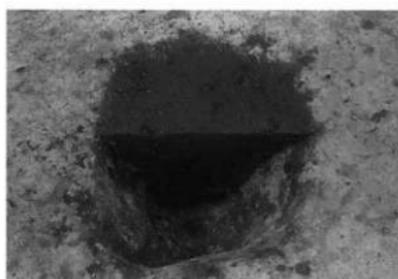
c SK 18 完掘 (東から)



d SK 18 土層断面 (北から)



e SK 19 完掘 (南から)



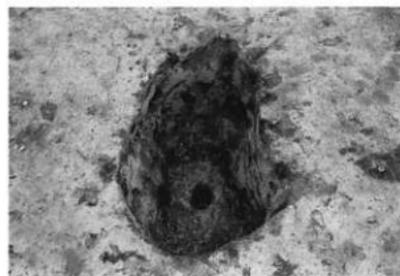
f SK 19 土層断面 (南から)



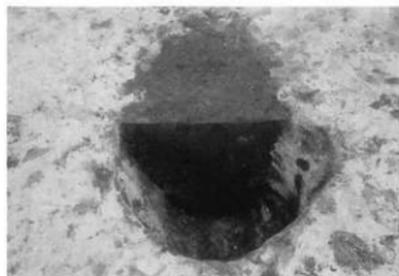
g SK 20 完掘 (西から)



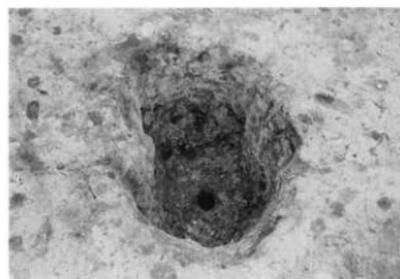
h SK 20 土層断面 (南から)



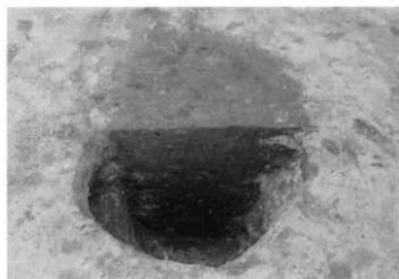
a SK 21 完掘 (北から)



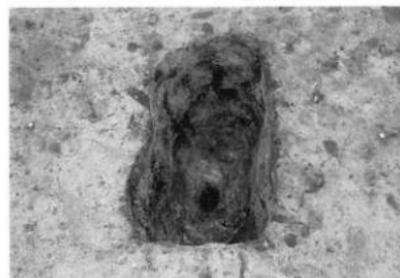
b SK 21 土層断面 (北から)



c SK 22 完掘 (北から)



d SK 22 土層断面 (北から)



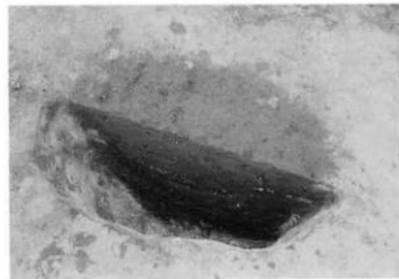
e SK 23 完掘 (北から)



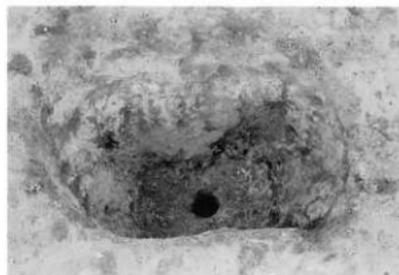
f SK 23 土層断面 (北から)



g SK 24 完掘 (東から)



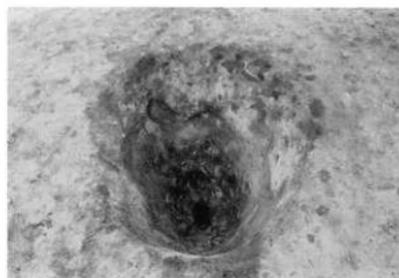
h SK 24 土層断面 (南西から)



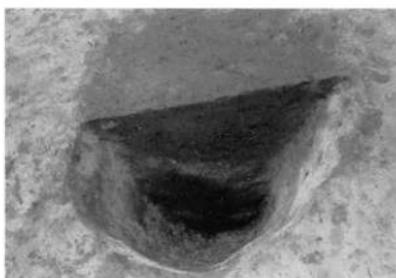
a SK 25 完掘 (西から)



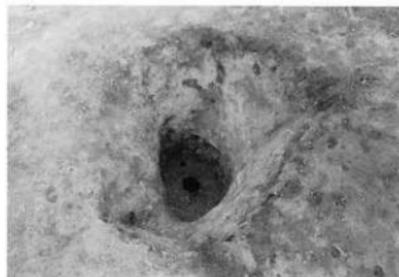
b SK 25 土層断面 (南から)



c SK 26 完掘 (南から)



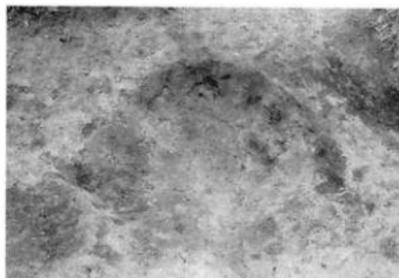
d SK 26 土層断面 (南から)



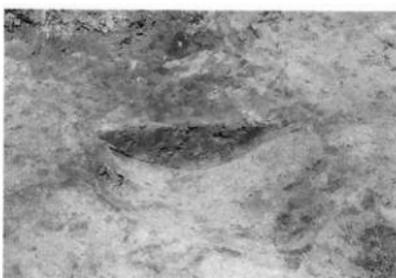
e SK 27 完掘 (南から)



f SK 27 土層断面 (南から)



g SK 28 完掘 (南から)



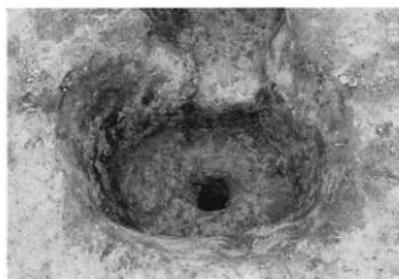
h SK 28 土層断面 (西から)



a SK 29 完掘 (南から)



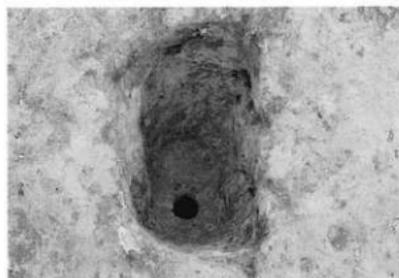
b SK 29 土層断面 (西から)



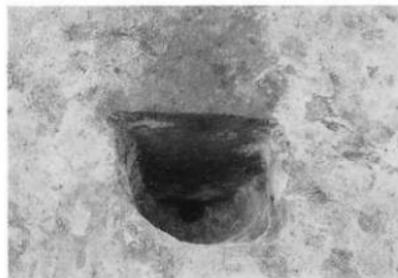
c SK 30 完掘 (南から)



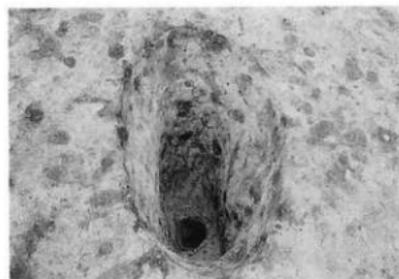
d SK 30 土層断面 (南から)



e SK 31 完掘 (南から)



f SK 31 土層断面 (南から)



g SK 32 完掘 (南から)



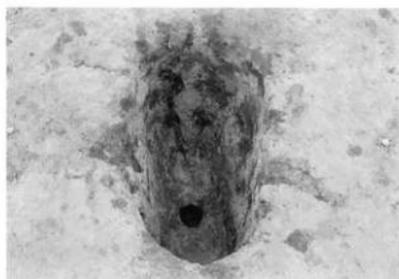
h SK 32 土層断面 (南から)



a SK 33 完掘 (南から)



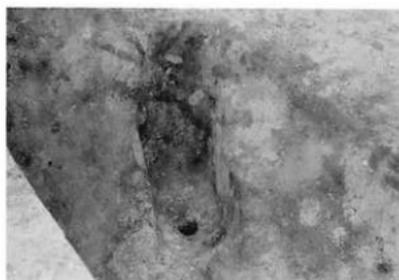
b SK 33 土層断面 (南から)



c SK 34 完掘 (南から)



d SK 34 土層断面 (南から)



e SK 35 完掘 (南西から)



f SK 35 完掘 (西から)



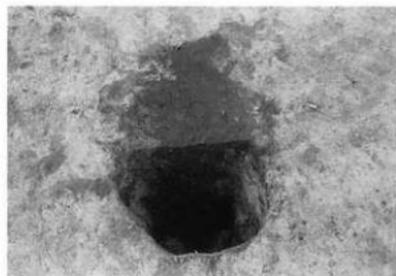
g SK 36 完掘 (南から)



h SK 36 土層断面 (南から)



a SK 37 完掘 (南から)



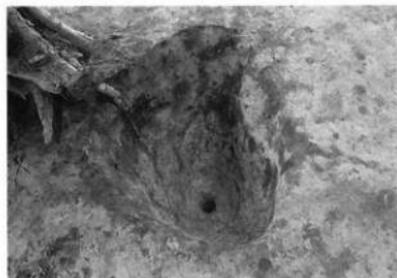
b SK 37 土層断面 (南から)



c SK 38 完掘 (南から)



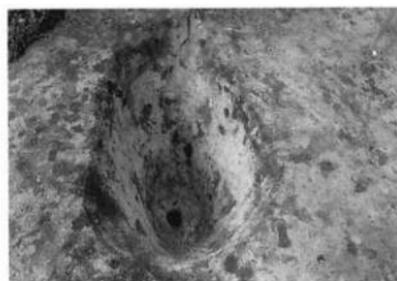
d SK 38 土層断面 (南から)



e SK 39 完掘 (南西から)



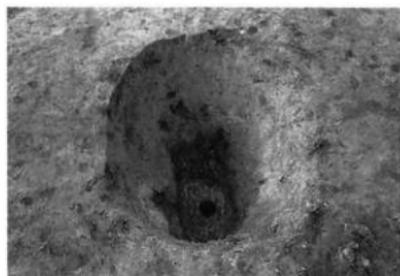
f SK 39 土層断面 (南東から)



g SK 40 完掘 (南西から)



h SK 40 土層断面 (南から)



a SK 41 完掘 (南西から)



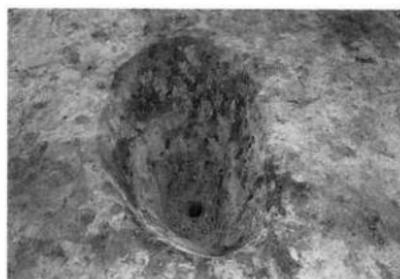
b SK 41 土層断面 (南西から)



c SK 43 完掘 (南西から)



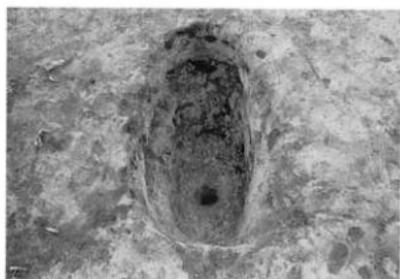
d SK 43 土層断面 (南から)



e SK 44 完掘 (南西から)



f SK 44 土層断面 (南から)



g SK 42 完掘 (南西から)

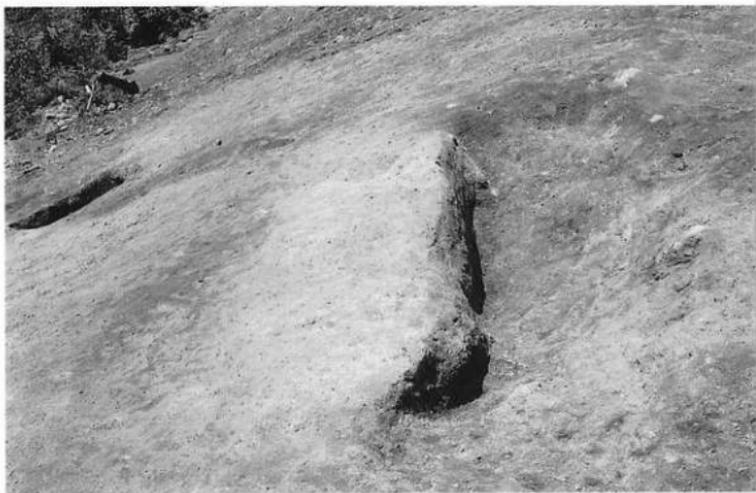


h SK 45 完掘 (南東から)

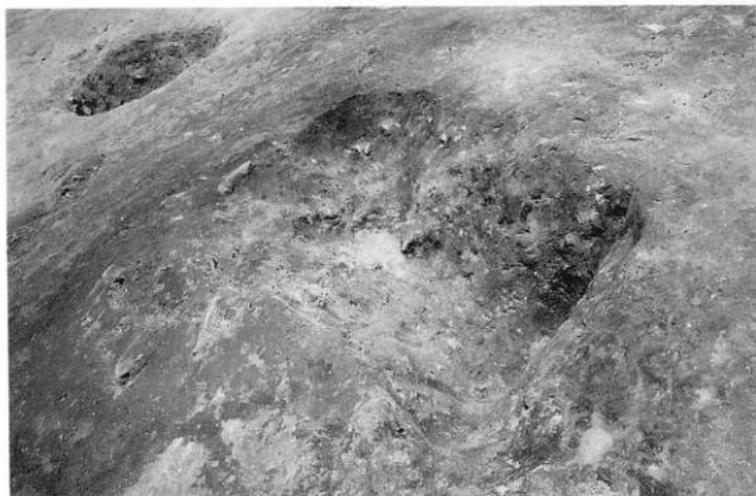
a SX1完掘
(南東から)



b SX2完掘
(南東から)



c SX3完掘
(南西から)





a 空中写真(東から)



b 同左(南西から)



c 調査前全景
(南東から)



d 調査後全景
(南から)

a SB1完掘
(南から)



b SB1遺物出土状況
(南から)



c SB1土層断面
(南から)





a SB1土層断面
(東から)



b SB1カマド検出
状況(西から)



c SB1カマド土層
断面(南西から)

a SB2完掘
(南から)



b SB2土層断面
(東から)



c SK1完掘
(南から)





a SK 1土層断面
(東から)



b SK 2完掘
(南東から)

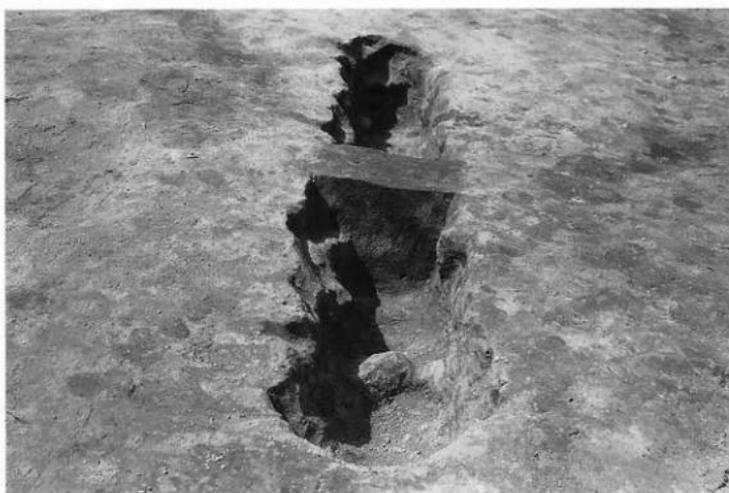


c SK 2土層断面
(東から)

a SX1完掘 (南から)



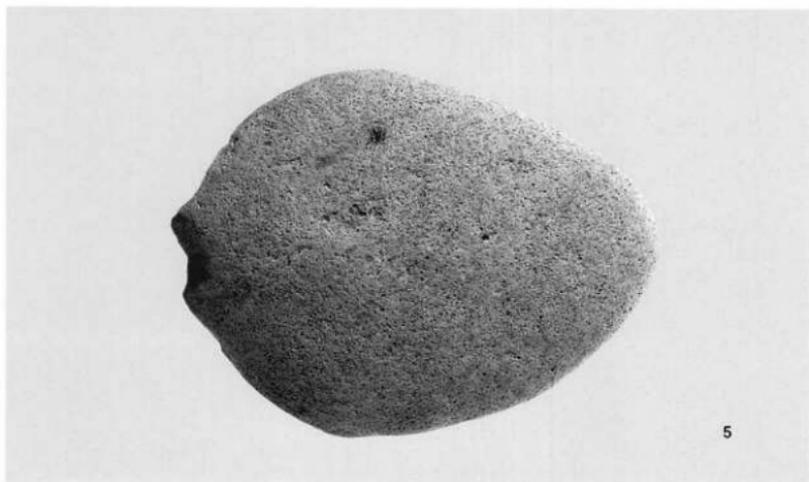
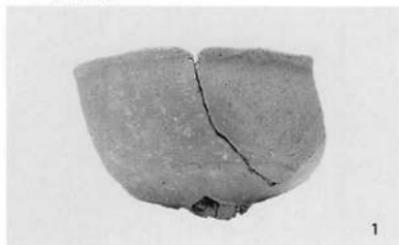
b SX1土層断面 (南から)



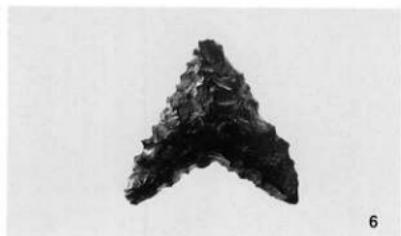
c SX2完掘 (南から)



SB 1 出土遺物



調査区外出土遺物



石谷 3 号遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはくつちようきほうこく								
書名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (26)								
副書名	石谷2号遺跡・石谷3号遺跡								
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書								
シリーズ番号	第50集								
編著者名	曾根 猛								
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室								
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL082-295-5751								
発行年月日	2013年3月5日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因	
		市町村	遺跡番号						
いしだに ごう いまき 石谷2号遺跡	ひろしまけんしゅうぼらし 広島県庄原市 くちわらちようまん 口和町金田	34210	34603- 184	34° 50' 53"	132° 54' 52"	20091104 ～ 20091226	400	記録保存調査	
						20100413 ～ 20100918			2,800
						20091104 ～ 20091226	800		
いしだに ごう いまき 石谷3号遺跡	ひろしまけんしゅうぼらし 広島県庄原市 くちわらちようまん 口和町金田	34210	34603- 185	34° 51' 05"	132° 54' 44"	20091104 ～ 20091226		記録保存調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
石谷2号遺跡	その他	縄文時代	窪穴42	なし					
石谷3号遺跡	集落	古墳時代	竪穴住居跡2	須恵器 土師器 台石	造付けカマド				
要 約	石谷2号遺跡	北から南へ延びる低丘陵の尾根線上に立地する。A地点で陥穴4基、B地点で陥穴38基を検出した。陥穴の平面形は楕円形20基、隅丸長方形12基、円形6基、隅丸方形2基、長方形2基である。陥穴の底面に小ピットを設けるものが35基、何の施設もないものが7基である。後者は平面規模が大きく、とくに深さは2m以上のものがほとんどである。本遺跡では、形態・規模の均質な数基の陥穴が一定間隔で整然と並んでおり、大きく4群に分けられる。出土遺物はないが、立地や規模・形態などから縄文時代の陥穴群の可能性が高い。							
	石谷3号遺跡	北から南へ延びる低丘陵に東から貫入する小谷の北側斜面に立地する。竪穴住居跡2軒、土坑2基、その他の遺構2を検出した。竪穴住居跡のうち1軒は造付けのカマドを伴う2本柱の方形住居で、規模は東西4.4m、南北2.2m(現存規模)である。住居跡からは土師器の高杯脚部や須恵器の杯蓋片・杯身片、台石のほか、炭化材や焼土が出土しており焼失家屋である。出土遺物から6世紀中頃の住居跡と考えられる。もう1軒の竪穴住居跡も同じく方形住居跡とみられる。調査区外にも竪穴住居跡1軒が確認されており、これらの住居群で集落を構成していた可能性がある。							

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第50集

中国横断自動車道尾道松江線建設
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(26)
石谷2号遺跡 石谷3号遺跡

発行日 平成25(2013)年3月5日

編集 財団法人広島県教育事業団事務局 埋蔵文化財調査室
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号
TEL (082) 295-5751 FAX (082) 291-3951

発行 財団法人広島県教育事業団

印刷所 朝日精版印刷 株式会社